

平成 28 年度 教育改善報告書

— 効果的かつ効率的な教育活動を目指した点検評価 —

平成 29 年 3 月

国立長野高専
教育改善委員会

平成 28 年度 教育改善報告書

目 次

1. 平成 28 年度教育改善委員会の活動方針	・ ・ ・ ・ ・	1
1-1 目標		
1-2 点検業務の流れ		
1-3 課題の分類、改善提案		
1-4 今年度の主な活動内容		
2. 平成 28 年度 各種委員会の活動状況の点検結果	・ ・ ・ ・ ・	5
1. 教務委員会		
2. 学生支援委員会		
3. 寮務委員会		
4. 専攻科運営委員会		
5. 研究支援委員会		
6. 広報企画室		
7. 国際交流センター		
8. 教育改善委員会		
9. 第三者評価対応委員会		
3. 平成 28 年度における各種点検報告	・ ・ ・ ・ ・	21
3-1 卒業生・修了生および企業に対するアンケート調査より 改善内容の検討と各部署への依頼		
3-2 学習・教育目標の達成度に関する調査報告書の点検		
3-3 学生との意見交換会に関する点検		
3-4 平成 27 年度参与会で出された改善点の整理		
3-5 実施済研修会の効果の点検およびその改善		
3-6 エビデンス保管の電子化の改善および有効活用の検討		
4. 平成 28 年度 FD 研修会実施報告	・ ・ ・ ・ ・	31
4-1 平成 28 年 第 1 回 FD 研修会 (9 月 21 日) 「不本意からの脱却：不本意進学者及び転職者の満足度を上げるためには」 信州大学高等教育研究センター 講師 李 敏 氏 「高専卒業生の能力と評価：卒業後の評価との関係から」 信州大学経法学部経済学科 准教授 岩田 一哲 氏		
4-2 平成 28 年 第 2 回 FD 研修会 (12 月 1 日) 「情報セキュリティインシデントの状況と対応」 高専機構CSIRT, 有明高専 准教授 松野 良信 氏		
4-3 平成 28 年 第 3 回 FD 研修会 (3 月 23 日) 「アクティブラーニングへのアプローチ」 長野高専電気電子工学科 准教授 渡辺 誠一 氏		
5. 平成 28 年度の活動に向けた各種委員会等への提言	・ ・ ・ ・ ・	35

付録

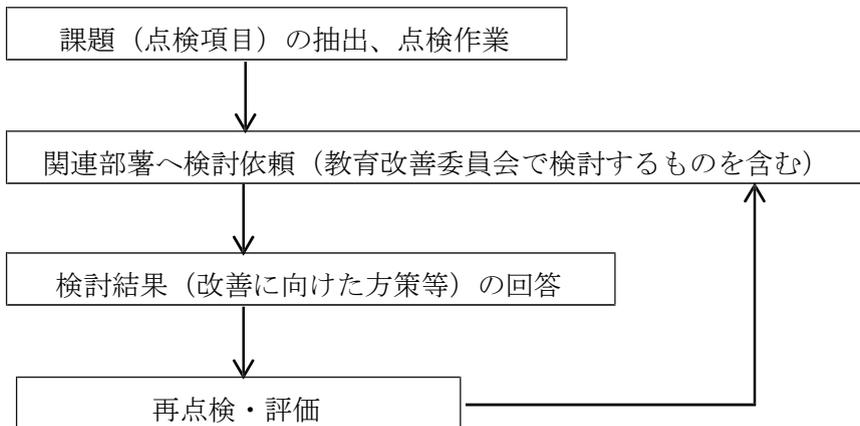
- 付録 1 平成 27 年度学習・教育目標の学生の自己達成度に関する調査報告書
- 付録 2 平成 28 年度学生会役員との意見交換会 議事録
- 付録 3 平成 28 年度専攻科生意見交換会開催報告
- 付録 4 第 12 回長野工業高等専門学校参与会概要
- 付録 5 平成 28 年度 教育改善委員会 議事概要

1. 平成 28 年度 教育改善委員会の活動方針

1-1 目 標

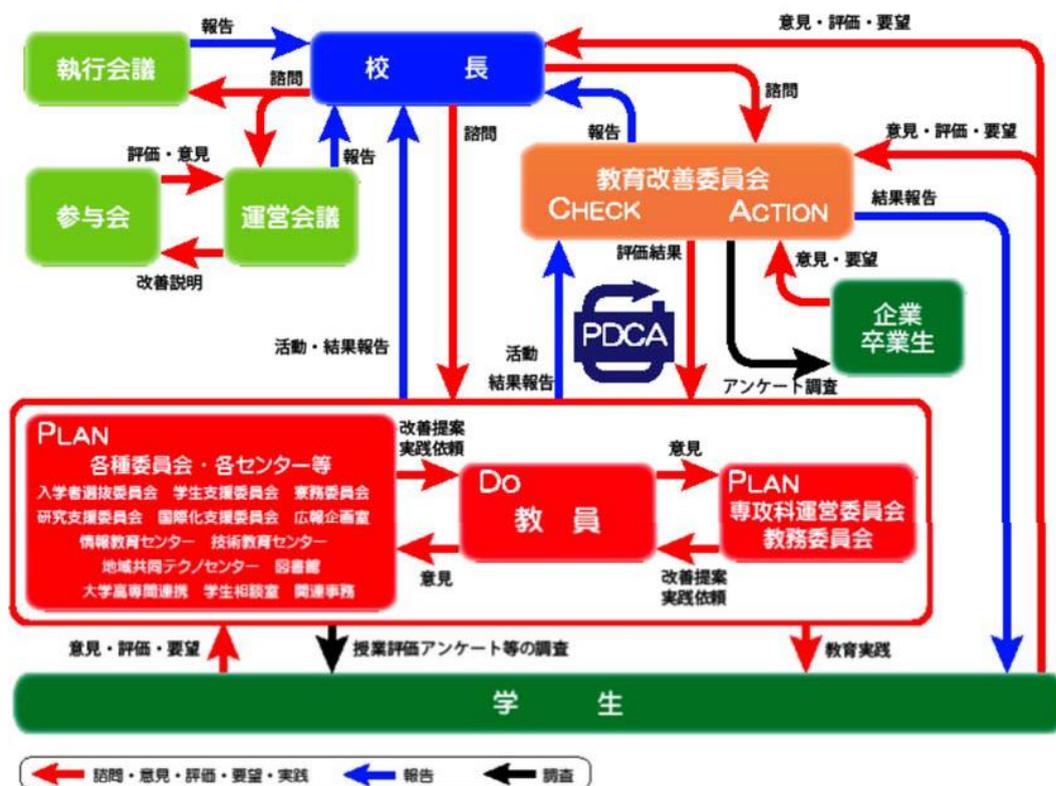
本校の教育システムを点検評価し、また教育水準を向上させるための取り組み(FD)を推進し、本校の教育改善に努める。特に PDCA サイクルの A(Action)を重視し、教育改善として次のサイクルにつながる活動を推進する。

1-2 点検業務の流れ (Check)



1-3 課題の分類、改善提案 (Action) -> (Next Plan)

- (1) 各種委員会等の活動状況を点検した後に整理された課題
- (2) FD 研修会での結果を分析した後に整理された課題
- (3) 重点項目として教育改善委員会で取り上げた課題
- (4) アンケート調査の分析から得られた課題
- (5) 外部評価で指摘された課題
- (6) 教員、学生、保護者等から指摘された課題



1-4 今年度の主な活動内容

- ◎ (1) 平成 28 年度各種委員会の活動状況の点検
 - 【各種委員会は、教務、専攻科運営、研究支援、学生支援、寮務、広報企画、国際交流センター、教育改善、第 3 者評価対応 の 9 委員会とする。】
 - ・ 平成 27 年度教育改善委員会より提言した課題の検討・改善状況を点検する。
(平成 27 年度教育改善報告書を参照)
 - ・ 平成 28 年度当初に提示された計画に基づいて行った活動内容を点検する。
 - ・ 平成 29 年度の活動に向けた課題を整理し提言する。
- ◎ (2) 授業改善システムの評価と点検
 - ・ 授業改善用チェック・提言シートに基づいて作業を行う。
 - ・ 当システムの評価・点検を行う。
- ◎ (3) 学習・教育目標の達成度（本科 5 年）に関する調査の点検および自己評価シート（学年別 学習・教育目標の達成度）に関する改善方法の点検
 - ・ 平成 26 年度本科 1 年～5 年生は新システムを導入した。その調査方法および調査報告の点検および評価を行う。
- ◎ (4) 学生との意見交換会に関する点検
 - ・ 平成 28 年度開催の意見交換会について点検および評価を行う。
- ◎ (5) 平成 27 年度参与会で出された意見に基づいた改善点の整理
 - ・ 平成 27 年度の参与会（2 月開催）の点検と提言
- ◎ (6) 卒業生・企業向けアンケート調査結果からの改善点を検討し各部署へ改善点を依頼教育改善に向けた作業計画（申し合わせ事項）【（ ）は前回の年度】
 - 1 年目（平成 26（21）年度）：アンケート調査の実施
 - 2 年目（平成 28（22）年度）：改善内容の検討と各部署への依頼
 - 3 年目（平成 28（23）年度）：改善内容の実施**
 - 4 年目（平成 29（24）年度）：改善内容を含めた教育システムの評価
 - 5 年目（平成 30（25）年度）：特に申し合わせにない。
 - 6 年目（平成 31（26）年度）：卒業生・企業向けアンケート調査の実施
- ◎ (7) 実施済研修会の効果の点検およびその改善
 - ・ 平成 28 年度は、効果を検討する。
- ◎ (8) FD 研修会の企画・開催および報告書の作成：年 2 回開催を予定
 - 第 1 回 FD：____月予定（情報セキュリティ関連）
 - 第 2 回 FD：____月予定（未定）
- ◎ (9) エビデンス保管の電子化の改善
- ◎ (10) エビデンスの有効活用の検討
- ◎ (11) エビデンス収集・保管の改善について
 - ・ 表紙等書式の改善【(H28 版)をグループウェアにアップする】
 - ・ 教育改善委員会ワーキンググループ（チーフ：伊藤委員）が担当する。
 - ・ エビデンスの保管の改善。
 - ・ ハードディスクの再構築。
- ◎ (12) 試験問題レベルの保証確認 → 結果は学生課で保管
 - ・ 年 2 回実施（前期 10 月、後期 3 月）
 - ・ 各学科の保証確認作業は各学科の教育改善委員会委員が行う。

- ◎ (13) 各部署への検討依頼、回答の集約
- ◎ (14) メール目安箱への対応（学生への周知を5月下旬に実施）
- ◎ (15) 平成28年度版教育改善報告書の編集・発行

昨年の実施事項であるが、今年の活動計画からは外す。

- ◎ 第Ⅲ期中期目標・計画の点検

委員会予定

- 第1回 5月： 方針、業務分担、エビデンス収集
卒業生アンケート調査結果からの改善内容の各部署への依頼
 - 第2回 7月： 参与会からの改善点、実施済研修会の点検、
エビデンス保管の電子化の改善、授業改善システム（H27年）の実施の依頼
 - 第3回 9月： 授業改善システムの実施報告
学習・教育目標の達成度に関する調査の点検と改善
卒業生アンケート調査結果からの改善内容の点検
エビデンスの有効活用の検討
 - 第4回 11月： 試験問題レベル保証の確認（前期分）、各種点検の報告
 - 第5回 1月： 教育改善報告書作成依頼、各種点検の報告
 - 第6回 3月： 教育改善報告書のまとめ
（委員会の活動状況点検、学生との意見交換会を含む）、
試験問題レベル保証の確認（後期分）
- その他 メール： FD 研修会の実施について
試験問題レベルの保証（作業依頼）

平成 28 年度教育改善委員会業務分担

	担当項目	堀内	遠藤	小林裕	伊藤	渡辺	小林茂	山崎	事務	備考
1	平成 28 年度各種委員会の活動状況の点検	◎改善 第 3 者	専攻科	教務	広報	研究支援 寮務	学生支援	国際交流	○	3 月上旬
2	授業改善システムの評価と点検 (作業含む)	◎ (制御)	○ (環境)	○ (機械)	○ (情報)	○ (電気)	○ (一般)	○ (一般)		7 月依頼 9 月上旬
3	学習・教育目標の達成度に関する調査の点検 自己評価シートに関する改善方法の点検	○		◎						9 月上旬
4	学生との意見交換会の点検	○						◎		3 月上旬
5	平成 27 年度参与会で出された改善点の整理	○					◎			7 月下旬
6	卒業生・企業向けアンケート調査結果から 改善内容の実施	○	◎							9 月上旬
7	実施済研修会の効果の点検およびその改善	○				◎				7 月下旬
8	FD 研修会の企画・実施	○		第 2 回 企画・報告		第 1 回 企画・報告	第 1 回 企画・報告	第 2 回 企画・報告	○	年 2 回開催
9	エビデンス保管の電子化の改善	○	○		◎					7 月下旬
10	エビデンスの有効活用の検討	○	○		◎					9 月上旬
11	エビデンス収集・保管の改善 (実務作業含む)	○			◎					WG で担当
12	試験問題レベルの保証確認	○ (制御)	○ (環境)	○ (機械)	○ (情報)	○ (電気)	○ (一般)	○ (一般)	◎	前期 11 月 後期 3 月
13	各部署への検討依頼、回答の集約	◎							○	随時
14	メール目安箱への対応	◎	○	○	○	○	○	○	○	随時
15	教育改善報告書の編集・発行(PDF)	◎	○						○	3 月下旬

2 平成 28 年度 各種委員会の活動状況の点検結果

1. 教務委員会

(1) 平成 27 年度の教育改善委員会からの提言された課題の改善状況

提言された課題	評定	根拠資料等
時間割編成作業についての検討。	△	・主事との面談 →ソフトの導入を検討
専攻科と本科の連携した教育体制について。	×	・第 4 回 教務委員会資料ならびに議事録（以下、下線部省略） 専攻科との連携について
アクティブラーニングの継続審議について。	△	・第 1 回 授業公開について
アクティブラーニングの推進（学外実習、選択科目の効果的導入、寮内での高学年が低学年をサポートするシステムの活性化、学び方（方法論）の獲得）。	○	・第 1 回 授業公開について ・第 7 回 高専機構の研修について
インターシップの期間や対象学年を広げることに 関して。	○	・第 3 回 夏季自主研修について
同僚や他学生と比較して、語学やコミュニケーションおよび物事を表現するプレゼンテーション能力向上のため、学習・教育目標の F の充実。	×	検討なし
対応力、判断力、状況理解力、パイオニア精神、リーダーシップなど人間力や社会性に対する能力向上の充実。	×	検討なし
工学概論的な共通科目の設置や、学んできた専門分野以外の様々な分野の知識、融合複合分野に関する学習・教育目標の D3 の充実。	×	検討なし
技術士に関する啓蒙活動や情報提供等（講習会）を継続的、積極的な実施。	×	検討なし
新形式での学習・教育目標の達成度自己評価の結果について、教務委員会と専攻科運営委員会で連携して総括を行う。	×	検討なし
学習・教育目標の達成度自己評価の分析について、本科 5 年生と専攻科 2 年生だけでなく、各学年についても行い、その結果を活用して本来の目的である授業改善につなげていく。	×	・第 10 回 その他 ・第 11 回 平成 28 年度学習教育目標の達成度自己評価に対する報告書 ・第 12 回 学習教育目標達成度自己評価について
新教育課程について（特に学習単位など）学生への説明。	△	教務委員が 4 年生に対して説明を行う

(2) 平成 28 年度委員会の活動方針に基づいた活動状況

(1) 夏季特別研修 ・夏季特別研修を利用した学生の主体的学習の検討と運用 ・目標設定、計画書、報告書の作成、発表等	○	・第 1 回 夏季自主研修期間について ・第 4 回 夏季自主研修について ・第 5 回 夏季自主研修について ・第 6 回 夏季自主研修について ・第 8 回 夏季自主研修について ・第 9 回 夏季自主研修について ・第 10 回 夏季自主研修について
--	---	--

<p>(2) 学力向上対策、実力テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勉強意欲向上のための検討と対策 ・学生の積極的な授業への参加 ・再試験受検者数および留年者減少のための対策 	○	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回 平成28年度実力テストの結果について ・第9回 学生の本級留置及び退学に関する改善計画 ・第10回 学生の本級留置及び退学の対策について ・第12回 平成29年度第1回実力テストについて ・第13回 平成29年度第1回実力テストについて
<p>(3) 学習到達度試験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前指導、結果の分析・評価及びフィードバックの検討 ・学習全般に対する意欲を持たせる方策の検討 	○	<ul style="list-style-type: none"> ・第6回 CBT トライアル実施について ・第7回 CBT トライアル実施について学習到達度試験(3年)の日程について ・第8回 平成28年度学習到達度試験について ・第9回 3年生を対象にした数学および物理および課題演習実施について ・第10回 平成28年度国立高等専門学校学習到達度試験の実施について
<p>(4) 学力不振者への対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別学習支援 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回 低学年の進級に関する方針について
<p>(5) 授業時間割編成の効率化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業時間割編成のための組織化と編成方法の検討・作業(ワーキンググループ) ・学科長に理解してもらった上で提出 ・選択授業の希望調査のWeb入力 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・第10回 選択科目の説明について ・第11回 選択科目について
<p>(6) 達成度試験・成績評価のあり方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別編成授業のシミュレーション 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回 「達成度試験」実施について ・第3回 「達成度試験」実施について ・第4回 前期中間達成度試験の反省について ・第7回 特別編成授業(11/29~12/5)について
<p>(7) 教育課程の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習単位制度の浸透 ・選択科目の同時開講の科目数、受け入れ人数を含めた調査と調整 	○	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回 選択科目について ・第7回 平成29年度教育課程編成について ・第8回 平成29年度教育課程一覧表(案)について ・第10回 平成29年度教育課程について
<p>(8) モデルコアカリキュラムの対応調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育内容とコアカリキュラムの整合性の確認 ・対応科目のレベル付けとルーブリック評価導入の検討 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・第8回 モデルコアカリキュラム本案(ver. 1.0)に関する意見聴取について
<p>(9) 諸行事・学事暦等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・諸行事の見直しを含む平成29年度学事暦の検討 	○	<ul style="list-style-type: none"> ・第4回 平成29年度学事暦について ・第5回 平成29年度学事暦(案)について ・第7回 平成29年度学事暦(案)について ・第8回 平成29年度学事暦(案)について ・第9回 平成29年度学事暦(案)について ・第10回 平成29年度学事暦について
<p>(10) インターンシップ事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1機関に対して各科1名の派遣 	○	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回 本科実務訓練および専攻科学外実習について

<ul style="list-style-type: none"> ・企業説明会の検討（ポスターセッションなど） ・企業と学生の意見交換の場を作る ・海外インターンシップの推進 		<ul style="list-style-type: none"> ・第 2 回 海外インターンシップについて、インターンシップ事業について ・第 3 回 インターンシップ事業について ・第 4 回 インターンシップ事業について ・第 6 回 インターンシップ事業（4） ・第 7 回 インターンシップ事業（4） ・第 9 回 実務訓練公募情報の周知方法について
<p>(11) 授業公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業公開日の検討 ・関連分野の教員のグループ化および相互参観の実施と参加教員数の増加対策 	○	<ul style="list-style-type: none"> ・第 1 回 授業公開について ・第 7 回 授業公開について ・第 8 回 授業公開について ・第 9 回 後期授業公開まとめについて
<p>(12) 学科・科目間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報教育と専門科目、応用数学と専門科目、理科と専門科目の連携の継続 	○	<ul style="list-style-type: none"> ・第 3 回 科目間連携会議について ・第 4 回 科目間連携会議について ・第 5 回 学科・科目間連携会議について ・第 6 回 学科・科目間連携会議について ・第 7 回 学科・科目間連携会議について ・第 8 回 科目間連携会議（10（月））報告ほか ・第 9 回 科目間連携会議について ・第 10 回 科目間連携会議について ・第 11 回 科目間連携会議について ・第 13 回 科目間連携会議について
<p>(13) 専攻科との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本科と専攻科の連携を強化した教育体制の構築 ・本科と専攻科のカリキュラムの連続性の検討 	×	<ul style="list-style-type: none"> ・第 4 回 専攻科との連携について
<p>(14) 編入生（普通科）受け入れの体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校（普通科）からの編入生の受け入れのための教育課程 	×	検討なし

(3) 平成 29 年度の活動に向けた提言

- ・授業評価アンケートについて Web 化されたが、回答者数が著しく低下している。また、複数科目を別途入力する必要があり、その手間から学生は事務的に回答しているという声も聞く。とりまとめの業務効率が上がったかもしれないが、アンケート自体の有用性、効果が大きく失われている。回答者数の確保、各科目に対して有用となるような工夫など、授業評価アンケートのやり方を検討して欲しい。
- ・平成 27 年度分の学習・教育目標達成度自己評価について、分析が行われていない。また、平成 28 年度分のアンケート項目について、より有用となるよう内容を検討するとの事であったが改善がない。アンケート項目と分析方法の検討、結果の分析を行い、PDCA サイクルを継続的に行ってもらいたい。
- ・本科と専攻科の連携が行われていないので、検討が必要と思われる。
- ・コミュニケーション能力、リーダーシップなど人間性教育に関する具体的な方策があまり検討されていないので、検討してもらいたい。

2. 学生支援委員会

(1) 平成 27 年度の教育改善委員会からの提言された課題の改善状況

今後の課題	評定	根拠資料 等
1. 教務委員会と連携して、低学年のキャリア教育を充実させる。	○	第 6 回（工嶺祭中の企業展） 第 8 回（キャリアセミナーの開催） 第 8 回（リーダーズ研修会）
2. 問題行動の未然防止	○	第 1 回（飲酒・喫煙・車両違反指導要領）

(2) 平成 28 年度委員会の活動方針に基づいた活動状況

主な活動内容	評定	根拠資料 等
1. 福利厚生 学資支援（授業料免除、奨学金、健康・安全、他） 授業料免除の選考、奨学金の推薦、交通安全講習会などの実施、学生の福祉について	○	第 1 回（入学料徴収猶予、奨学金推薦、新年度における諸手続き） 第 2 回（日本学生支援機構奨学生の選考、外国人留学生学習奨励費給付制度推薦者の選考、天野工業技術研究所奨学金推薦選考結果報告、心のケア講習会、いじめ防止） 第 3 回（北信奨学財団奨学生 日本学生支援機構奨学生の推薦、授業料免除「学業優秀と認められる者」の基準変更の説明） 第 4 回（夏季休業中の注意） 第 5 回（前期授業料免除の選考） 第 6 回（卓越した学生に対する授業料免除） 第 7 回（1 年薬物乱用防止講習会、3 年生と性との講演会） 第 8 回（後期授業料免除の選考、寄附金の使用計画） 第 9 回（日本学生支援機構奨学金の推薦基準） 第 10 回（学生表彰） 第 11 回（授業料免除の選考基準、学生表彰、学生の公欠に関する取扱い、春季休業中の注意事項） 第 12 回（学生便覧の改正点）
2. 進路活動支援（進路説明会、進路講演会、他）進路講演会、進学講演会、講習会の開催、進路指導方針の検討	○	第 6 回（進路指導意見交換会の報告） 第 6 回（工嶺祭企業展、進路指導方針） 第 7 回（4 年生進路講演会） 第 6 回（平成 29 年度進路指導方針について、会社説明会について、平成 29 年度卒業予定者の進路説明会） 第 10 回（進路指導会議）
3. 学生会活動支援（学生会、ボランティア、他）学生会への支援、各種委員会活動の活性化	○	第 2 回（クラスマッチの要項審議） 第 4 回（緑の自転車、献血活動） 第 4 回（学生と学校との意見交換会） 第 8 回（学生会選挙、関東信越地区高専文化発表会不参加、焼き芋企画） 第 9 回（学生の意見要望書への対応） 第 10 回（リーダーズ研修会、学生会選挙） 第 12 回（学生と校長との懇談会）

4. 課外活動支援（部長会、各種コンテスト、他）部 同交会の指導体制の確立、長期休業中の課外活動の実施方法の検討	○	第1回（部 同好会指導教員） 第2回（部 同好会活動の指導に関するガイドライン） 第4回（長期休業中の宿泊を伴う課外活動、学生厚生補導設備充実費の募集、全国高専大会壮行会） 第5回（夏季休業中の課外活動における校内宿泊、部 同好会指導教員との意見交換会、部室点検、同好会の設立） 第7回（部 同好会指導教員との意見交換会） 第11回（学年末休業中の課外活動、部 同好会指導教員） 第12回（平成29年度課外活動指導教員）
5. 工嶺祭等支援（工嶺祭、他）工嶺祭のあり方の検討と指導、実行委員会活動への支援	○	第1回（工嶺祭の実施に関する各学科の意見聴取の依頼） 第2回（アンケート結果について） 第3回（今年度の変更点の確認） 第4回（工嶺祭の指導体制） 第5回（工嶺祭日程 指導体制） 第6回（工嶺祭実施計画と指導体制等） 第7回（工嶺祭日程 指導体制） 第8回（工嶺祭での指導） 第9回（工嶺祭の反省） 第10回（工嶺祭の反省） 第12回（工嶺祭の反省 来年度の方向性）
6. 生活指導（環境美化 清掃、車両、飲酒喫煙、問題行動、他） アレパイトの指導、問題行動の防止 清掃デーの実施、交通安全 車両通学規定の遵守、車両 喫煙防止の巡回指導、SNSに関する指導	○	第1回（飲酒 喫煙 車両違反指導要領、駐輪場の清掃 前期清掃分担当、女子更衣室の使用、学校生活の安全と信頼関係の構築、交通安全およびSNS 講習会） 第2回（学生用駐輪場、本校のいじめ防止基本方針について） 第3回（盗難報告） 第4回（駐輪スペースの移動について） 第5回（ポケモンGOへの対応について） 第5回（朝の交通指導） 臨時（不正行為） 第8回（冬期間の車両特別許可申請、構内の落ち葉片付け） 第10回（不用自転車、放置自転車の整理） 臨時（不正行為） 第11回（不用自転車、放置自転車の整理） 第12回（不正行為）
7. 広報活動（学生会活動、工嶺祭活動、課外活動等の広報、HPによる緊急時の連絡等）	○	就職 進学状況、学生会活動、課外活動等について web 上への速やかな結果報告他広報活動が随時行われた。

(3) 平成29年度の活動に向けた提言

教務委員会と連携して、低学年のキャリア教育を充実させる。

3. 寮務委員会

(1) 平成 27 年度の教育改善委員会からの提言された課題の改善状況

(根拠資料内の「(資料○)」は委員会資料)

今後の課題	評価	根拠資料 等
・登校カードの周知の徹底および活用方法の検討	×	・平成 28 年度第 1 回寮務委員会(付録1)で、階長に指導はするが、徹底・活用方法の検討はしていない。
・摂食率アップを目的とした、摂食率チェックシステムの効率的な活用方法の検討	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 4) ・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5) (朝食摂取調査は3回実施し結果を保護者に通知、寮担任が生活指導に活用した事例を紹介)
・違反指導の厳重化	△	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5) (特に厳重化と言う資料は見当たらなかったが、学生の努力で点呼時不在や行事欠席、コアタイム違反が減少している一方、居室内乱雑などの件数が増加している。学生の一層の努力を期待したい。)

(2) 平成 28 年度委員会の活動方針に基づいた活動状況 (根拠資料内の「(資料○)」は委員会資料)

おもな活動内容	評価	根拠資料 等
1. 寮の安全と環境整備 (1) 施設・設備 ・男子風呂ボイラー修繕, 緊急時の自動消灯および電気自動解除システムの導入, 自火報設備の校舎との連動, 3 号館 2 階談話室の新設, 7 号館玄関の電気錠の増設, 5 号館北側物干し場の塗装, 防犯カメラ有線ネットワークの改修 (2) 感染症対策と感染状況 ・インフルエンザが 1~2 月に流行 (3) 避難訓練等 ・1 年生対象(5/11), 全寮生対象(10/26)実施 ・AED 講習会を実施(1/23)	△	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5) (H27 年度実施していた「心の相談室」は H28 年度実施無し)
2. 寮生の生活全般 (1) 学習時間の確保と勉強会 ・低学年の学生に対して学習時間のコアタイムを設定(20:30-21:30), 当直教員による巡視も実施 ・定期試験前に食堂で勉強会を実施, 学年成績が通生を上回った (2) 入寮・継続在寮 ・H29 年度新規入寮予定者 100 名に対して協力退寮を依頼する必要がなかった ・通学時間、学年、成績、欠課時数、寮生会役員、違反点を総合的に勘案している	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
3. 当直および点呼時不在者 ・雄風寮は点呼当番からの報告を受ける方法に、清風寮は寄宿舎指導員に依頼して、宿直者は報告を受けるだけになった	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)

・寮生の不在に関して 2 件警察が介入した。点呼時不在者の取り扱いについてさらに検討する必要がある		
4. 朝巡視 ・寮務委員のみの巡視を行った ・「登校カード」の有効利用を考える	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
5. 開閉寮作業 ・年 7 回実施 ・PC へのバーコード入力による入寮登録導入によって効率的な開寮作業が行えた	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
6. 大掃除 ・年 4 回実施(4/2, 8/5, 12/20, 2/22) ・寮生会が中心となって自主的に行えた	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
7. 防犯カメラシステムの改善 ・警察から 2 件映像提示を要請された ・1～3 号館に LAN ケーブル網を拡張した ・映像の保存および閲覧方法について改善の余地がある	△	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
8. 違反指導 ・違反件数が約 15%減少, 悪質な違反は皆無 ・違反点数により清掃活動が課された ・盗難被害届出がなかった	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
9. 寮ネットワークの利用と不正使用対策 ・動画サイトの利用によるトラフィック増 ・学生 PC に通信量モニタリングソフトをインストールさせてトラフィック抑制(50GB/月)の努力をさせている	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
10. 寮生会活動(雄風寮) ・定期的に寮務委員会と寮生会とで「寮生会との協議会」が開催された	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5) 4 月 26 日(火)、5 月 25 日(水)、6 月 22 日(水)、7 月 13 日(水)、10 月 26 日(水)、12 月 20 日(水)、1 月 25 日(水) の計7回開催
11. 寮祭 ・年 2 回寮祭が行われた。抽選会の参加者は多いが、他の企画の参加者が少ない。	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
12. 女子寮 ・入寮希望者増に対応して、7 号館全館を女子寮にした ・7 号館 3 階の補食室を留学生専用とした	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
13. 留学生と国際交流学生 ・留学生数は 5 年生 4 名、4 年生 5 名、3 年生 5 名の計 14 名であった。 ・男子留学生は全員 3 号館となり、共用室も 3 号館を使用することになった。 ・外国からの交流学生として、短期ステイ 9 名(香港 IVE)、長期ステイ 2 名(泰日工業大学)、3 名(シンガポールポリテク)があった。	△	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5) (留学生や短期ステイ学生との国際交流イベントができなかった)
14. 違反システム管理 ・寮生指導調書をグループウェアのワークフロー機能を活用することで観覧時間の短縮と作業の簡易化へとつながった	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)

15. 外泊届の電子化 ・点呼の電子化を目標に、外泊届の電子化の試験運用が行われた	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
16. 保護者への連絡の緊密化 ・寮生保護者懇談会を工嶺祭期間中に開催 ・雄清通信を年 3 回発行した	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
17. 一日体験入学 ・寮見学者数が H27 年度に比べて減少した(362 名→303 名)	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
18. 夏季自主研修期間および長期休業中の宿泊を伴う課外活動への対応 ・夏季自主研修期間(9 月)の宿泊者数は 100～199 名となり、寮生の希望を受け入れられていた ・8 月下旬と 3 月下旬の 2 回に渡り、学生支援委員会と共に宿泊を伴う課外活動への対応がされていた	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
19. 授業公開日における保護者との懇談会 ・1 学年会が 3 主事と保護者との懇談会を企画して、約 50 名の参加があった ・保護者からの意見・要望を聞く機会が増えた	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
20. 省エネルギー・環境対策 ・節電の掲示、冬休み明け開寮日のエアコン運転の指導	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
21. 摂食率調査 ・5 月、7 月、10 月に延べ 35 日間実施した。6～7 割程度しか朝食を摂っていないことがわかった ・学生毎に状況が把握できるため、寮担任が生活指導に活用した	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)
22. BlackBord の利用 ・MAC アドレス登録、寮生アンケートなどで活用された	○	・平成 28 年度第 15 回寮務委員会(資料 5)

(3) 平成29年度の活動に向けた提言

- ・防犯カメラシステムの安定運用
- ・留学生や短期ステイ学生との交流活動
- ・寮生からの相談窓口の充実
- ・登校カードの有効活用

4. 専攻科運営委員会

(1) 平成26年度の教育改善委員会からの提言された課題の改善状況

平成27年度の教育改善委員会から提言された課題の改善状況について以下に報告する。

今後の課題	評価	根拠資料等
学習教育目標達成度調査のまとめと分析をさらに強化する。	△	第1,6回専攻科運営委員会議事概要 (以下, 第1回委員会議事概要, と記す)

(2) 平成28年度委員会の活動方針に基づいた活動状況

主な活動内容	評価	根拠資料等
1. 学生への対応		
(1) ガイダンス, 履修科目指導と単位取得状況把握	○	第1,2回委員会議事概要
(2) 進路指導, 学生指導	○	第1,6,7,8,9,10回委員会議事概要
(3) 意見交換会の実施	○	第1回委員会議事概要
(4) 面談と学習教育目標達成度調査, 学生満足度調査	△	第6,14回委員会議事概要
2. 専攻科入学試験	○	第1,2,3,4回委員会議事概要
3. 学外実習	○	第2,3,4,5回委員会議事概要
4. 特別研究に対する指導	○	第1,2,3,4回委員会議事概要
5. 学士取得に対する指導		
(1) 学士取得に関する説明会	○	第1,3,6回委員会議事概要
(2) 学修まとめ科目に関する指導	○	履修計画書、学修総まとめ科目の要旨の連絡メール
(3) 特例適用選考の対応	○	第4,10回委員会議事概要
6. 意見交換会の実施	○	第14回委員会議事概要
7. 教育課程と授業等に対する対応	○	第4,6回委員会議事概要

(3) 平成29年度の活動に向けた提言

前年度からの指摘事項である、学習教育目標達成度調査、および学生満足度調査のまとめと分析、有効活用が求められる。

5. 研究支援委員会

(1) 平成 27 年度の教育改善委員会から提言された課題と改善状況

今後の課題	評定	根拠資料等
・外部資金獲得に向けて一層の努力を行う	○	<ul style="list-style-type: none"> ・外部資金獲得に向けて各種講演会や活動の案内を随時行っている ・5/30 付メール「科学研究費助成事業における研究計画調書添削希望者の募集について」 ・8/23 付メール「平成 28 年度知財研修会（教職員対象）の実施について」 ・12/14 付 GW「外部資金獲得支援研修（テレビ会議）」

(2) 平成 28 年度委員会からの活動方針に基づいた活動状況

活動項目と主要課題	評定	根拠資料等
1. 教員の明細書執筆能力の向上 ・外部協力者（弁理士）に依頼，特許明細書執筆の指導を行った	○	・平成 28 年度第 1 回研究支援委員会（資料 1）
2. 発明の評価・帰属，審査請求判定，特許権維持判定 ・申請がある都度随時行った	○	・平成 28 年度第 1・2・3・4・5・6・7・8・9 回研究支援委員会議事録
3. ミマキエンジニアリング包括協定に基づく研究テーマ ・新規テーマ募集を行い，配分研究テーマを選定した	○	・平成 28 年度第 1・6・9 回研究支援委員会議事録
4. 「科学研究費助成事業」審査結果における研究費の配分 ・審査結果が A 判定の教員 7 名に対してミマキエンジニアリング包括協定に基づく寄付金から各 10 万円を配分	○	・平成 28 年度第 2 回研究支援委員会議事録
5. 「長野工業高等専門学校紀要発行に関する申し合わせ」の改定 ・論文原稿のファイルサイズ変更（1MB→20MB），卒業研究・特別研究等で本校教員の指導下にある学生を論文の筆頭執筆者として認める	○	・平成 28 年度第 3 回研究支援委員会議事録
6. 研究支援委員会のポータルサイト ・グループウェアに通知文などが掲載されている	○	・ https://nagano-nct.cybozu.com/g/bulletin/index.csp?cid=211

(3) 平成 29 年度の活動に向けた提言

- ・外部資金獲得に関する情報提供について一層の充実をお願いしたい。
- ・配分研究費が削減される中，校内予算を活用した研究費支援についてお願いしたい。

6. 広報企画室

(1) 平成 27 年度の教育改善委員会から提言された課題と改善状況

今後の課題	評定	根拠資料等
ホームページの充実	○	「高専スイッチ」コンテンツを PC 用からスマートフォン用に移植した。 部活動・同好会活動紹介ページの表示形式を整理した。 H28 年度中に 3 件実施 (7/16～17:まつもと広域ものづくりフェア参加者 13482 名 (7/15～18:3 日間)、9/4:キッズサイエンス 2016 in TOiGO 参加者約 1250 名、11/3:長野高専キッズサイエンス 2016 参加者 2031 名)
科学イベントの実施	△	スカイパーク科学館が廃止されたため、これに代わるイベントを検討したが、実施するまでには至らなかった。
県内の科学イベント・産業フェアへの参加協力	◎	会議資料参照。 H28 年度中に 5 件参加 (5/11:しんきんフェア, 11/3～4:ぞっこんさく市, 11/13～15:諏訪圏工業メッセ, 10/28～29:産業フェア in 善光寺平, 10/21～22:上田産業展)
出前授業	◎	会議資料参照。 テーマ数:32, 実施授業回数:45 回, 延べ受講者数:1940 名
刊行物の作成	◎	学園だより(予算削減のため、年4回発行を年3回の発行とした。その際生じる掲載記事の減少をなるべく少なくするため、卒研テーマを Web 掲載することとした)・ポスター・中学生向けパンフレット、学園だより、要覧、入学案内、ポスター、英語版要覧、Web サイト誘導チラシを発刊した。
ノベルティの作成	◎	シャーペンとペン型消しゴムを、1 日体験入試に配布した。

予算減に対する対応の検討	○	スカイパークの実施を一旦、中止し、今後の経過を見ることにした。 出前授業形式による代替施策を計画したが、開催場所の都合により今年度は実施に至らなかった。
--------------	---	---

(2) 平成 28 年度委員会からの活動方針に基づいた活動状況

活動項目	評価	根拠資料等
エコバッグのデザインをテクノセンターと共通化しコスト削減をはかる	○	一括発注し、コストを軽減した。
科学イベントの実施	◎	会議資料参照 2016 まつもと広域ものづくりフェア(7/16・17), 来場者総数 13,482 名, 7/46 テーマ実施, 参加教職員 5 名, 学生 14 名 ・キッズサイエンス 2016 in ToiGO (9/4), 参加者総数 1,250 名, 8/36 テーマ実施, 参加教職員 7 名, 学生 26 名 ・長野高専キッズサイエンス 2016 (11/3), 参加者総数 2,031 名, 13/43 テーマ実施, 参加教職員 23 名, 学生 104 名.
出前授業について、開催のあり方、教員の負担軽減、学内での認知、評価の仕組みを検討する	◎	会議資料参照。 教員の負担軽減の一環として、複数教員で対応可能なテーマを各学科から提出することを、次年度の施策として提案。 出前授業をサイエンス・ツアー、公開講座をサイエンス・ライブと名称変更し、しくみを改善した。
広報連絡担当者について、依頼方法と目的を整理する	○	広報担当者が連絡員も兼ねるようにした。 連絡窓口を組織の代表である各組織の長に依頼することとした。
刊行物について在校生が卒業後も広報用に画像をしようできるよう策を講じる	◎	承諾書の一新を検討した。

学園だより(冬号)に掲載してきた卒業研究テーマを web 掲載に移行することの可否を検討する	◎	移行することに合意が得られた。卒業研究, 特別研究テーマを掲載するページを設置し, 掲載した。
インターネットでのリスティング広告の研究	○	GoogleAdWords, 高校受験ナビを取り上げ, 検討資料を作成し, 費用, 効果等を検討した。
現在、入学時に在学中の画像使用承諾書を得ているが、卒業後も一定期間継続使用できる策を講じる	○	卒業・修了後も継続使用できるように変更した。
ミマキエンジニアリング様のご厚意で継続している長野駅前トライビジョンについて年度当初にアナウンスする	△	十分周知できていない。今後、更なる周知を図る。

(3) 平成 29 年度委員会の活動に向けた提言

- ・ 従来の広報活動(web ページの充実、科学イベントの実施、県内科学イベント・産業フェアへの参加協力、出前授業、刊行物作成、ノベルティ作成)を継続し、より充実したものにしていく。
- ・ 個別の広報活動に対する費用(金銭・労力)と効果の定量的な検証
- ・ 広報活動への外部有識者の登用の検討
- ・ 他大学の広報活動の調査
- ・ 中学校教員・塾講師への本校のアピール機会設定
- ・ 予算減に対する対応の検討

7. 国際交流センター

(1) 平成 27 年度の教育改善委員会から提言された課題と改善状況

今後の課題	評定	根拠資料等
従来の国際交流活動を継続し、より充実したものにしていく	○	平成 28 年度国際交流センター活動報告書

(2) 平成 28 年度委員会の活動方針に基づいた活動状況

活動項目	評定	根拠資料等
英語弁論大会への支援	○	7 月に校内で英語弁論大会を実施した。また、関東信越地区大会に 4 名が参加した。
学生の国際的学術活動への推進	○	ISTS2016 において専攻科生 1 名が研究発表を行い、最優秀賞を受賞した。
海外インターンシップの支援	○	海外インターンシップとして本科 4 年生が台湾に 5 名、香港に 9 名、インドネシアに 4 名、カンボジアに 2 名ベトナムに 5 名参加した。専攻科 1 年生がタイに 2 名、台湾に 3 名、シンガポールに 1 名参加した。
外的機関との交流・提携の推進	○	ベトナムのダナン工科大学と交流協定を締結した。
国際会議への出席の推進	○	ISTS2016 において専攻科生 1 名が研究発表を行った。
国際的視野の広がりや国際的コミュニケーション力の向上の育成	○	8・10 月に東京日本語教育センターとの交流会を実施した。
外国機関等に所属する外国人との交流事業の実施	○	4～5 月にタイの泰日工業大学から学生 4 名を受け入れた。その中で松本・安曇野方面の研修も行った。7～8 月に香港 IVE から学生 9 名を受け入れた。その中で松本・安曇野方面の研修も行った。9～10 月にシンガポールのシンガポールポリテクニクから 3 名の学生を受け入れた。その中で松本・安曇野方面の研修も行った。9～10 月にタイの教育省関係者とタイカレッジから学生 26 名を受け入れた。その中で松本・安曇野方面の研修も行った。
海外留学・語学研修等への啓蒙	○	12 月にタイへ 10 名の学生を派遣し、テクニカルカレッジの学生との交流会に参加した。2～3 月にタイへの研修旅行を実施した。
留学生交流会の企画・実施	○	懇談会を 6 月に実施し、意見交換会を 2 月に実施した。
留学生の学生生活の支援	○	長野中央警察署から警察官を招いて安全講習会を実施した。
広報活動	○	海外からの視察及び学生の海外学会発表について、学園だよりに掲載した。
予算の獲得	○	JASSO からの協定派遣奨学金に専攻科生 4 人分（タイ・台湾）、本科生 10 人分（香港・台湾）が採択された。
国際的活動報告書の作成	○	3 月に報告書を作成した。

- (3) 平成 29 年度委員会の活動に向けた提言
- ・従来の国際交流活動を継続し、より充実したものにしていく。

8. 教育改善委員会

(1) 平成 27 年度の教育改善委員会から提言された課題の改善状況

今後の課題	評定	根拠資料等
①エビデンスの有効活用	×	電子化が定着したが、有効活用の実施を望む(次年度への課題)
エビデンス保管の電子化の改善について	△	表紙改善要望等があり、表紙の必要性和記載内容の検討を今後行う。(次年度への課題)
②科目別自己評価シートに関する改善方法の点検	△	平成26年度から「学習・教育目標の達成度に関する調査」として、教務委員会で実施したが、報告書は提出されていない。調査内容と分析方法について検討中のため、今後、点検を行う。(次年度への課題)
③学習・教育目標の達成度に関する調査の分析・評価の点検	△	②と同じ(次年度への課題)
④授業改善システムの評価と点検	△	評価は実施したが、点検・改善は実施していない(次年度への課題)。

(2) 平成 28 年度委員会の活動方針に基づいた活動状況

主な活動内容	評定	根拠資料等
①平成 28 年度各種委員会の活動状況の点検	○	5回で報告、提言を決定
②授業改善システムの評価と点検	△	評価は実施したが、点検・改善は実施していない(次年度への課題)。
③学習・教育目標の達成度に関する調査の点検	△	教務委員会で実施したが、報告書は提出されていない。調査内容と分析方法について検討中のため、今後、点検を行う。(次年度への課題)
④学生との意見交換会に関する点検	○	5回で報告
⑤平成 27年度参与会で出された意見に基づいた改善点の整理	○	5回で報告
⑥卒業生・企業向けアンケート調査結果からの改善点を検討し各部署へ改善点を依頼	○	5回で報告
⑦実施済研修会の効果の点検およびその改善	○	FD研修はその場でアンケートを実施し、3回、4回、5回で結果を報告。
⑧FD 研修会の企画・開催および報告書の作成 第1回「高専卒業生キャリア調査結果」9/10 第2回「情報セキュリティに関して」12/1 第3回「アクティブラーニングについて」3/23	○	5回で報告
⑨エビデンス保管の電子化の改善	○	表紙改善要望等があり、表紙の必要性和記載内容の検討を今後行う。(次年度への課題)

⑩エビデンスの有効活用の検討	×	電子化が定着したが、有効活用の活動の実施を望む(次年度への課題)
⑪エビデンス収集・保管	○	第1回 今年度の収集保管を決定 ワーキンググループで対応
⑫試験レベル保証確認	○	メールで学生課より依頼。4回で前期分、5回で後期分を確認
⑬各部署への検討依頼、回答の集約	○	随時実施
⑭メール目安箱への対応	○	随時実施
⑮平成 28 年度版教育改善報告書の編集・発行	○	5回で確認、グループウェア上で公開する。

(3) 平成 29 年度の活動に向けた提言

- ①エビデンスの有効活用と保管の電子化の改善について
- ②学習・教育目標の達成度に関する調査の分析・評価の点検
- ③授業改善システムの評価と点検

9. 第3者評価対応委員会

(1) 平成 27 年度の教育改善委員会から提言された課題の改善状況

主な活動内容	評価	根拠資料 等
①JABEE 審査実施に向けての自己点検書作成・資料作りと審査実施	○	4月より、自己点検書の作成と根拠資料の収集を行う。また、表6の作成依頼をし、4月末に完成予定。

(2) 平成 28 年度委員会の活動方針に基づいた活動状況

主な活動内容	評価	根拠資料 等
①JABEE 認定継続審査への対応	○	11月より、自己点検書の作成と根拠資料の収集を行う。また、表6の作成依頼をし、4月末に完成予定。
②認定専攻科の教育の実施状況等の審査への対応	○	専攻科運営委員会に協力して申請書を提出。
③参与会の開催	○	2/1 に実施、3/2 報告書がグループウェアで公開された。
④卒業生アンケートの実施	○	7月に実施した。分析は外部に依頼
⑤外部からの各種調査への対応・研修会への参加	○	随時、対応・参加した

(3) 平成 29 年度の活動に向けた提言

- ①機関別認証評価実施に向けての準備

3. 平成 28 年度における各種点検報告

3-1 卒業生・修了生および企業に対するアンケート調査より

改善内容の検討と各部署への依頼

2014(H26)年度に本校H23, H24年度専攻科修了, 本科卒業生および就職・進学先機関に対して行われた本校の教育評価アンケート調査結果において指摘された事項に対する, 本年度の点検結果を以下に報告する.

なお, アンケートの調査項目と調査結果に関しては, 2014, 2015(H26, H27)年度教育改善報告書に詳述されているため, 本年度の報告では割愛する.

(1) アンケート調査結果のまとめと提言

同僚や他学生と比較して, 語学やコミュニケーションおよび物事を表現するプレゼンテーション能力が低い傾向を示しており, 学習・教育目標のFの充実が望まれる.

工学概論的な共通科目の設置や, 学んできた専門分野以外にも様々な分野の知識が要求されている. 融合複合の重要性を感じ, 学習・教育目標のD3の充実が望まれる.

技術士に関する啓蒙活動や情報提供等(講習会)を継続的, 積極的に実施していく必要がある.

(2) 本年度の取り組みと提言

アンケート調査実施結果における語学学習が不十分との指摘を受け, 本科では英語プレゼンテーション基礎, 英語コミュニケーションスキル等, 関係する科目増加や, 内容の検証と充実を図っている. また, 学生自身からもTOEICや英検等の外部評価により自身の実力を測ろうとする学生数の増加や, 海外へインターンシップを希望する学生数の増加からも, 語学学習に対する意欲向上がみられる.

さらに, コミュニケーション能力に対しては, 特に高学年の種々の授業において, プレゼンテーションを実施する科目が増加している.

以上より, アンケート結果で指摘された語学とコミュニケーション能力の向上に向けた取り組みがなされていると考えられる.

一方, 融合複合分野に対する科目を担う, 学習・教育目標のD3に対応した科目は現在, 専攻科における「産業システム工学概論」, 「産業システム工学輪講」, 「実践工学演習」の3科目である. 専攻科における開講科目の検討は毎年行っているが, 特例適用認定専攻科の審査結果を鑑みながら対応してゆく必要があり, 融合複合分野に対応する科目の充実は今後も継続した検討が望まれる.

また, 技術士に関する啓蒙活動や情報提供等(講習会)も継続的かつ積極的に実施していく必要がある.

3-2 学習・教育目標の達成度に関する調査報告書の点検

1. 平成 27 年度分調査より，本科と専攻科で分かれて調査報告を行うこととなった．本科と専攻科では調査内容が異なり，また組織としても異なるためである．

2. 本科の調査報告書の点検

(1) 調査内容

平成 27 年度は学習・教育目標の達成度に関する調査報告書が作成されていない．達成度調査自体は行っているとのことであったが，そのまとめ，分析等は行われず報告書作成に至っていない．

(2) まとめ

データ収集のみでは学生の達成度の確認，またそれを受けての改善に結びつけることができない．作成しなかった理由として，現在の調査内容では改善に結びつかないということで達成度調査の内容を精査し，また分析方法自体の改善も検討中ということであった．しかしながら，収集データの分析はしっかり行う必要がある．PDCA サイクルが途切れぬよう配慮した改善が必要である．今後，分析方法の改善を行った際には過去に遡り，分析を行っていない年度のものもしっかり確認，改善の提言を行ってほしい。

3. 専攻科の調査報告書の点検

(1) 調査内容

専攻科の学生に対し，各項目の学習・教育目標を挙げている．各項目の達成度について，平成 28 年 2 月 19 日に専攻科 2 年生全員を対象に専攻科運営委員会で調査・分析を行い，報告書【付録 1：平成 27 年度学習教育目標達成度自己評価に対する学生自己評価報告書】がだされている．

(2) 調査結果の概要

学習・教育目標の目安として，5 段階評価としてアンケート調査の結果は，両専攻別に教育目標ごとの帯グラフとしてまとめられている．

(3) 点検結果と検討課題

調査シートについて，学生へは電子データで配布し，教員への提出は紙ベースとなっており非常に非効率的である．さらに分析時には紙ベースの物を改めて電子化する作業も必要となる．提出も電子データで行わせ，面談時にはそのデータを表示させて行うなどの改善検討が必要である．

生産環境システム専攻の考察において，F-1，G-1 の低い理由が特別研究のテーマ変更を余儀なくされた学生の研究時間が短かったためとあるが，その根拠となる要素，因果関係が一切示されておらず非常に主観的な内容となっている．また，特別研究 I と特別研究 II とでテーマが異なることはシステム上，起こりうることであり想定されている事柄である．従ってテーマが変わった際のフォローアップや研究遂行計画に問題があると考えられる．主観的な考察ではなく，調査結果を元とした客観的な分析，考察を行ってほしい．また，それを元とした改善案の提示も行ってもらいたい．

考察において，両専攻共にデータの説明にとどまっている．調査結果を元に達成度の低い項目，それに関連する科目の分析を行ったり，過去の調査結果と比較し到達度の移り変わりを比較したりするなどの分析を行うなど，分析方法の改善を検討する必要がある．また達成度が低い項目に対してその具体的な改善案の検討についても必要である．

(4) まとめ

学習教育目標達成度調査の目的は，調査結果を元に授業改善を行う事にある．調査結果を元にした客観的な分析，そしてそれを考慮した授業改善の提言を行ってほしい．また，現状で本科と専攻科で連携がとれていないので，連携を行い本科の内容が専攻科で生きてくるような体制作りを検討する必要がある．

参考資料として付録1に，専攻科運営委員会から提出された【付録 1：平成27年度学習教育目標達成度自己評価に対する学生自己評価報告書】を示す．

3-3 学生との意見交換会に関する点検

(1) 本科学生との意見交換会の点検

学習・教育目標、教育課程、教育方法、評価方法、教育環境、学校行事などに対する意見や要望を学生から聞き、学校からは回答する形式の意見交換が、教職員および学生が一堂に会して例年行われている。今年度は学生の代表である学生会役員を中心とした学生 14 名との意見交換会を実施した。学生側参加者の内訳は、28 年度正副学生会長、28 年度各係長などであった。教職員側の参加者は、校長、教務主事、学生主事、寮務主事、学生支援委員、学生係職員であった。実際の意見交換では、「授業等学習面の課題」、「部活動に対する支援」、「工嶺祭に関する要望」、「各種事務手続き」などのテーマに基づいて話し合いがなされた。

話し合いは基本的に学生側から提示された意見に教職員が直接答える形式で行われた、教員から問いかけるテーマもあった。主な意見と回答は以下の通りである。

- ・学修単位科目が増えたことについて。
家庭学習をしっかりとし、不明な点は質問をするなどして、スピードについていってほしい。
- ・部室等の設備の修繕をお願いしたい。
すぐに改修等は難しいが、顧問の先生を通じて学生係に知らせてほしい。
- ・施設使用願や学割申請などでうまく手続きができないときがあった。
職員側の理解不足等もあったので、今後十分気を付けたい。

また、その他の意見として、「ロボコンを優遇しすぎではないか」や、「工嶺祭の時間短縮について」などがあつた。

(2) 専攻科学生との意見交換会の点検

専攻科において、研究、施設および設備、講義、進路などに対する意見や要望として、

- ・特別研究の計画書や報告書が不明確である
- ・共用室管理に関する情報共有不足
- ・休講や補講の連絡を徹底してほしい
- ・輪講時の課題やプレゼンテーションについての諸問題
- ・就活情報などを他高専と共有してほしい
などが出された。

平成 29 年 2 月 17 日に開催された意見交換会の場で学生にこれらの回答があり、説明された。

(3) まとめ

学生からの要望は多くあり、建設的な要望も多く、学校側は耳を貸して、説明を行ったり、改善策を考えたりする必要がある。

また、学習・教育目標、教育課程、教育方法、評価方法に対する意見や要望があまり学生からはでていないが、意見を積極的に聞いて頂ければと思う。

書面でのやり取りだけでなく、会議方式で学生・教員が双方の顔を見ながら要望を聞き、説明することが重要と考える。

なお、参考資料として、以下を付録に掲載する。

- ・付録 【H28 第 1 回学生会との意見交換会_議事録】
- ・付録 【平成 28 年度専攻科意見交換会報告書】

3-4 平成 27 年度参与会の報告書の点検と出された改善点の整理

平成 28 年 2 月 1 日に第 12 回長野高専参与会が実施され、その概要が報告書「第 12 回 長野工業高等専門学校参与会議事概要」にまとめられている。この報告書の内容に基づき、本校が今後取り組むべき課題は何か、以下に報告する。

1. 参与会の概要

(1) 出席者

- ・ 参与会のメンバー → 7 名
- ・ 本校関係者 → 校長他 22 名

(2) テーマ → 「長野高専における教育の改善に関する取組みについて」

(3) 協議題

- ・ 卒業生アンケートの集計結果について
- ・ 学事歴の変更及びカリキュラムの改訂について

(4) 議事内容

参与会会長である半田志郎信州大学工学部長が議長となり、議事が進行された。上記の協議題ごとに本校担当者より配布資料に基づいた説明があり、その後質疑応答が行われ、参与会のメンバーよりいくつかの貴重な提言をいただいた。

2. 今後の課題

参与会の質問・意見を基にして、今後本校が取り組むべき課題を整理した。

- (1) アクティブラーニングの更なる充実
- (2) 夏季休業中の自主研修期間についてその実施方法
- (3) キャリアデザイン、キャリア演習の更なる充実
- (4) 一般教養科目（人文系科目，化学・生物等の理系科目）の充実
- (5) 更なる財源の確保と、獲得の推進
- (6) 学生の積極的姿勢を身につけるための方策の検討

なお、参考資料として、以下を付録に掲載する。

付録 4 【第 12 回長野工業高等専門学校参与会概要】

3-5 実施済み研修会の効果の点検およびその改善

平成28年度には3回FD研修会(9/21, 12/1, 3/23)が開催された。研修会の効果を点検するため、FD研修会終了後に参加者に対しアンケート調査を実施した。開催時期、研修会の内容が活かせるかどうか、開催回数について分析する。

(1) 第1回(9/21, 内容: 高専卒業生アンケート, 参加者: 50名)

・開催時期

夏季自主研修期間中ということもあり、開催時期についてアンケート回答者の82.6%が妥当であると回答があった。授業もなく業務的に余裕があり、学会発表なども一段落した時期でもあることから、開催時期としては適切だったと考えられる。

・今後の授業改善に活かせるか

アンケート回答者の47.8%が「大いに活かせる」「少し活かせる」との回答があったのに対して、43.5%が「あまり活かさない」「全く活かさない」との回答であった。講演内容がアンケート集計結果の分析(考察)に限定されていたこともあり、実際の授業の場面でどう活かしたら良いかわからない意見が多く、今後出される予定の報告を待ちたい。

(2) 第2回(12/1, 内容: 情報セキュリティ, 参加者: 95名)

・開催時期

後期中間達成度試験期間中の開催であった。開催時期についてアンケート回答者の69.6%が妥当であると回答があった。試験期間を避けてほしいとの自由記述欄に意見を寄せた参加者もあり、実施時期について継続して検討する必要がある。

・情報セキュリティとして活かせるか

アンケート回答者の98.7%が「大いに活かせる」「少し活かせる」との回答があった。実例を交えた講演で、実務にすぐ活かせる内容であったことから、FD研修としては一定の効果があったと思われる。特に事務職員の参加が多く良かった。

・今後の要望

自由記述欄にはアクティブラーニングや教員としての資質を高める方法などに関する講演の希望が出た。また、参加者から講演をしても良いとの意見もあった。これらを鑑み、年度当初はFD研修会を2回開催を計画していたが、新年度の授業に活かしてもらうために第3回FD研修会を「アクティブラーニング」で実施することとした。

(3) 第3回(3/23, 演題: アクティブラーニング, 参加者: 44名)

・開催時期

春季休業期間中の開催であった。開催時期についてアンケート回答者の77.4%が妥当であると回答があった。次年度に活かすのであれば12月頃の開催が良いと自由記述欄に意見を寄せた参加者もいた。2ヶ月以上前に開催案内をしたにも関わらず、公務出張以外の理由で欠席する教員も多かった。教員のFDに対する意識改革も必要だと考えられる。

・今後の授業改善に活かせるか

アンケート回答者の96.8%が「大いに活かせる」「少し活かせる」との回答があった。実例を交えた講演で、授業にすぐ活かせる内容であったことから、FD研修としては一定の効果があったと思われる。今後、各教員が教育改善に取り組み、来年度以降に教育改善報告書として提出されることを期待したい。

・テーマ設定

アンケート回答者の61.3%が「参加したい」との回答があった。自由記述欄に「2回目もお願いしたい」との意見も寄せられ、期待されていることがわかった。

・実施回数

急遽1回追加して3回実施となったが、アンケート回答者の77.4%が「妥当であった」との回答があった。テーマと時期を適切に設定すれば、年3回程度の研修会の実施は無理ない範囲であると考えられる。

(4) まとめ

FD 研修会開催にあたっては、教員の業務に負担にならない開催時期と開催回数を配慮する必要がある。教育内容の改善に関する内容に関する講演の場合は、年度当初・期当初の授業に活かせるような時期を選ぶべきであろう。

研修会名を「FD 研修会」と付けると、出欠を取ることもあり出席率が向上する現状があり、FD (Faculty Development) は「教員の教育能力を高めるための実践的方法」の意味であるが、近年は教職員の職能開発全般に用いられていることから、近年では教育能力向上に関する講演会以外の内容が増えてきている。

本校では過去 5 年間で以下のテーマで FD 研修会を実施している。

平成 27 年度第 1 回	科研費獲得の方法とコツ	【研究費獲得】
第 2 回	アクティブラーニング	【教育手法】
第 3 回	高専卒業生キャリア調査結果	【調査結果】
平成 26 年度第 1 回	情報モラルと情報セキュリティ	【情報セキュリティ】
第 2 回	学生の自主性を伸ばす方策	【教育手法】
第 3 回	高専を取巻く現状と新たな高等教育機関	【高専の今後】
平成 25 年度第 1・2 回	心の健康	【メンタルヘルス】
第 3 回	イノベティブ・ジャパンプロジェクト	【教育手法】
平成 24 年度第 1 回	キャリア形成支援	【キャリア教育】
第 2 回	モデルコアカリキュラム	【教育手法】
平成 23 年度第 1 回	科学研究費採択数アップのための講習	【研究費獲得】
第 2 回	サンデル的対話型講義の思想と方法	【教育手法】

近年、高専機構主催の教育能力向上のための研修会が多く開催されてきているが、教員全員が参加する訳ではない。年 1~2 回は教育改善委員会が主体となって教育能力を高めるための研修にした方が良いと思われる。他の会については、他の委員会と連携してテーマを募るのも良いと考えられる。外部講習会への参加報告などについては教員会議を活用するなど、時間を有効に活用することで効率的な研修が実施できると考えられる。

3-6 エビデンス保管の電子化の改善および有効活用の検討

(1) エビデンス収集・保管システムについて

1) H28年度の作業概要

H28年度は JABEE 受審の年にあたるため、H26年度のエビデンスすべて・H27年度のエビデンスすべて・H28年度のエビデンス前期分を整備して提出する必要があった。今年度の教育改善WGで整理状況を確認したところ、H26年度とH27年度のエビデンスがほとんど整備されていない状況が判明した。1次調査と2次調査の2回にわけて、H26年度とH27年度のWGメンバーも動員して JABEE 審査時に整備されているべきすべてのエビデンスの有無を調査し、不足しているものを回収する作業を行った。その他の定期的なエビデンス収集は、回収期間のアナウンスが不足していたほかはほぼ滞りなく行われた。

2) エビデンスへのシラバス同梱について

JABEE 受審時に「エビデンス一式のなかにシラバスが含まれていない」という指摘があったため、H28年度のエビデンスとしてシラバスの電子データ(本校 HP で公開されているもの)を含めることとした。

3) エビデンス表紙について

依然としてエビデンス PDF につける「表紙」について「本当に必要か」という意見がある。今年度は JABEE 受審対応に時間をとられたため本件の議論には至らなかった。表紙自体の必要性、表紙への記載項目の必要性(単位数・最高点・平均点を記入することがエビデンスに必要なか?)など、来年度以降検討を要する。

3) エビデンスの模範解答作成について

JABEE 受審時に「模範解答として学生の 100 点答案が使われている」という指摘があった。来年度以降、教員自身が作成するよう指示を徹底する。

4) エビデンスの所在のチェックについて

JABEE 受審に際して H26 年度分からほぼすべての試験やレポートのエビデンスの有無をチェックしたが、エビデンス保管 PC に PDF として存在するのではなく、「手元にあるので必要なら出します」というエビデンスが複数あり、一部の教員はほぼすべてのエビデンスがこの状態であった。前述のエビデンスの有無チェックの際には現物があるかどうかの目視チェックを WG メンバーに義務づけしなかったため、担当教員の「あります」という主張のみで実際には存在しない/見つけられないことも十分に考えられる。手元に置いておくべき合理的な理由がない限り、統一的な保管場所にきちんと保存させその所在を保証することは、学校の義務の一つとして大変重要と考えられる。この点について来年度以降、検討する。

5) エビデンス保管 PC について

年度当初の時点で学生課に設置されていたエビデンス保管 PC(ノート PC 本体・NAS)は 2011 年度の購入から 5 年が経過し、経年劣化が心配された。また、これらの機材は教育改善資料室からそのまま移動してきたものであり、ノート PC 本体や NAS 本体の盗難に対する対策がパスワード以外にとられていない状態であった。さらに、WG の作業の一つとして年度末にエビデンスのバックアップ DVD を作成して学生課の金庫に保管することが明記されていたが過去数年はこれがなされておらず、NAS が破損することがそのまま学校としてのエビデンス消失を意味する状況になっていた。これらを解消するため、6 月にエビデンス保管 PC を新しい機種に更新した。エビデンスはエビデンス保管 PC に保管されると同時にデータバックアップ用 HDD に自動的にバックアップが作成される。機材はセキュリティワイヤーで固定し、簡単には持ち出せないようにした。エビデンス保管 PC のデータはバックアップ用 HDD だけでなく、USB メモリにコピーを作成し、学生課の金庫に保管した。

6) エビデンスの保持について

各教員が作成したエビデンス PDF はいったん各教員の PC に作成され、その後 WG メンバーに提出されることになるが、提出後も各教員の PC にファイルが残っていたり、学科によってはグループウェア上にファイル回収スペースを作成して学科教員から提出をさせ、エビデンス回収期間終了後もそこにファイルを放置するといったことがあるようである。言うまでもなくエビデンス PDF の流出を防ぐことは学校の危機管理として大変重要であり、暗号化されない PDF がインターネット直結の PC に無防備に置かれていたり、メンバーであれば誰からもアクセスできるファイル置き場に数ヶ月にわたってファイルを放置するなどの行為は危険と言わざるを得ない。提出後のファイル削除を徹底させるとともに、WG 側としては回収した後の完全な保存を保証する必要がある。

4. 平成 28 年度 F D 研修会実施報告

4-1 平成 28 年度 第 1 回 F D 研修会 実施報告

1. 研修会概要

講師：信州大学高等教育研究センター 講師 李 敏 氏
不本意からの脱却－不本意進学者及び転職者の満足度を上げるためには－
信州大学経法学部経済学科 准教授 岩田 一哲 氏
高専卒業生の能力と評価－卒業後の評価との関係から－

日時：平成 28 年 9 月 21 日（水）14:00～16:10
場所：電子情報工学科棟 5 階 100 番教室
司会：一般科 小林 茂樹 教授
開会挨拶：押田 京一 副校長（教務主事）
講師紹介：押田 京一 副校長（教務主事）
参加者数：50 名

2. 講演内容

(1) 高専卒業生アンケートの概要説明（楡井 雅巳 副校長（地域共同テクノセンター長））

このアンケートは東京高専が中心となって実施している KOSEN 発「イノベティブ・ジャパン」プロジェクト（文部科学省 大学間連携共同教育推進事業）の一環で、本校はその際には実施できなかったが、1 年後に東京高専で実施した内容とほぼ同一で、同窓会からの援助も受けて実施した旨の紹介があった。

(2) 高専卒業生アンケートの概要説明（中澤 達夫 特命教授（地域共同テクノセンター））

「高専は知られていない」と言う中で、今まで高専卒業生を対象とした客観的な調査結果がない中で、東京高専が 2014 年に 13 高専 14 キャンパスで「高専卒業生キャリア調査」を実施した（2016 年 12 月 16 日に報告会がある予定）。本校は 1 年遅れて実施した旨の紹介があった。

調査時期：平成 27 年 8 月～9 月，対象者：900 名，回収率：31%（275 名／877 名）

本校の結果として特徴だったのは、

- ・地元就職率が最も高い
- ・卒業研究やインターンシップの評価が低い
- ・専攻科に進学した卒業生はインターンシップが役立ったと評価が高い

また、東京高専特命教授 矢野眞和 氏が日本経済新聞 2016 年 3 月 7 日号に寄稿した記事の紹介があった。

(3) 講演「不本意からの脱却－不本意進学者及び転職者の満足度を上げるためには－」（李 氏）

李氏は教育社会学・高等教育を中心とした仕事をされており、冒頭に「キャリア研究の中で、進路が学習の満足度を下げてしまう」「15 歳の春、将来を決める人生の決断は重過ぎる」の話があった。著書「金子元久：大学教育の再構築，玉川大学出版（2013）」にある「学生動機のパターン」にある「高同調」「独立」「受容」「疎外」の 4 区分方法を紹介され、李氏は「高満足型」「失意型」「望外型」「疎外型」の 4 区分で「学生の類型」「進学」を分析した結果と、「高専における学習と生活」，「興味がある職場・職務とは」「高専での学習経験」「身に付けた能力」「読書習慣」「学習習慣」「社会関係資本」の観点で分析した結果について紹介があった。転職した高専卒業生は満足しているケースがみられ、仕事内容と専門とのマッチングが大切であり、常に知識を更新する努力が転職して興味のある職場・職務を得ていることが示された。

【質疑応答】

Q：いつの時点の「満足」か？

A：回答する時点として実施しています

(4) 講演「高専卒業生の能力と評価－卒業後の評価との関係から－」（岩田 氏）

分析をご担当されたのは問 13、問 34、問 35、問 36、問 39 で、「現在の能力」と「評価への満足度」，「高専卒業時の能力」と「評価への満足度」を分析した結果について紹介していただいた。

- ・卒業時の専門的能力では昇進できない
- ・卒業時の能力と現在の能力との関係は、
 - ・影響はある
 - ・長野高専以外の場合も影響はある
 - ・卒業時の能力→現在の能力→と言うように繋がっているのではない

【質疑応答】

Q：因子分析，学科別にするとどうなるのか

A：一緒に分析しているが，何かあれば言ってほしい

Q：学科ごとが知りたいと思った（コメント）

なお，講演では筑波大学国際産学連携本部 准教授 河野 良治 氏の講演「コンピテンシーとキャリア-高専の学生から見えるもの（仮題）」が予定されていたが，諸般の理由により中止となった。

3. アンケート集計結果（回収数：23名，回収率：46%）

項目1：テーマ設定はいかがでしたか

1：妥当であった 20人 2：妥当ではなかった 0人 3：どちらとも言えない 3人

項目2：第1回FD研修会としての開催時期は適当でしたか

1：適当であった 19人 2：適当ではなかった 2人 3：どちらとも言えない 2人

項目3：全体的な講演内容に興味をもてましたか

1：大いに興味をもてた 10人 2：少し興味をもてた 8人

3：あまりもてなかった 5人 4：全くもてなかった 0人

項目4：今後の授業改善に活かせる内容でしたか

1：大いに活かせる 4人 2：少し活かせる 7人 3：あまり活かさない 9人

4：全く活かさない 1人 無回答 2人

項目5：今後このようなテーマ設定の研修会に参加したいと思いますか

1：参加したい 13人 2：参加しない 1人 3：どちらとも言えない 9人

項目6：今回のFD研修会に対して何かご意見がありましたらご記入ください

- ・もう少し回収率を上げてほしい（良い方かもしれないが，60%くらい）。
- ・学生（特に女子学生）の卒業後のキャリアについての調査結果は高専の今後にとっても重要だと思うが，内容から得られたことは少なかった。
- ・前年度のアンケート結果を活用する意図として良かったと思う。
- ・アンケート集計結果を色々解説して頂きましたが，最終的な結論や方向づけ，提案などがわかりづらかったです。講演を聞いて次へのフィードバックができるようなまとめ方をして頂くと助かります。
- ・資料を配布しない，できないことの説明がわからない点が多くあったように思えた。
- ・低学年教育に関するFD

4. むすび

昨年12月4日行われた第3回FD研修会において東京高専が実施したアンケートの結果の一部が紹介されたが，今回の研修会では本校独自の調査結果と言うこともあり，興味深い内容であった。

李氏の講演では「学業成績は学習時間と比例」「満足度の低い卒業生は3年生の時に学習時間が減り中だるみしている」「読書をする人が良い転職をしている」「常に学び続けようとする努力」「教員と学生との人間関係が大切」が印象的だった。また，岩田氏の講演では「処遇について専門性以外の要素も見えてきた」の説明から，今後の学生指導にも工夫が必要であると感じた。

今回はアンケートの分析結果の一部のみが紹介されたが，後日アンケート

報告書が作成されるとの話があった。

4-2 平成 28 年度 第 2 回 F D 研修会 実施報告

1. 研修会概要

講師：高専機構CSIRT、有明高等専門学校 電子情報工学科 准教授 松野 良信 氏
講演題目1：情報セキュリティに関する講話
講師：本校情報教育センター 技術職員 淀 優介氏
講演題目2：本校におけるセキュリティインシデントの事例
日時：平成28年12月1日（水）15:00～16:30
場所：電子情報工学科棟5階 100番教室
司会：一般科 堀内 泰輔 教授
担当：小林祐介先生、山崎健一先生
参加者数：95名
教育改善委員会と情報教育センターの共催

2. 講演内容

2-1 情報セキュリティに関する講話 松野良信先生（高専機構CSIRT、有明高専准教授）

最初に情報セキュリティの概要についての説明があった。IT環境がより便利になるにつれて、様々なセキュリティ上の脅威がみられるようになった。数の上からも、増加傾向にある。高専機構内でも様々なインシデントが発生しており、本年の10月と11月に多くなっている。

実際に高専機構内で起きているインシデントの紹介があった。研究室サーバのマルウェア感染により、学校のネットワークが停止した事例。メール添付ファイルによるランサムウェア感染し、身代金要求が表示された事例。遠隔操作によるクレジットカード詐欺未遂が、Webサイトに表示された警告に従ったために発生した事例。デバイスの紛失・盗難について、具体的には保護者や学生の情報が入っているPCやUSBメモリを紛失し、個人情報漏洩した可能性があったという事例。昨年度2回標的型メールの訓練が行われていた。一番の問題は、標的型メールを開封したのちの報告義務が順守されていない点である。

サイバー攻撃の手法にはさまざまあるが、ほとんどの場合最初はメールで、圧縮ファイルである。ファイアーウォールで守られている場合でも、外側からではなく、内側から通信させ、遠隔操作や双方向通信を可能とするような巧妙な手段もある。最初はばらまき型、次に標的を見つけたら標的型へ移行して攻撃をする。

セキュリティ対策の必要性和限界。ウィルス対策ソフトをインストールしたうえでリアルタイムスキャンをすることが有効である。とはいえ、ウィルス対策ソフトにも時間がかかるなどの問題もあり、ユーザーの意識向上など、様々な角度からの対策が必要である。例えばウィルス対策ソフトのアップデートの頻繁な実施やIDやパスワードの管理などに注意すること。仮に情報セキュリティ被害にあった場合は、すぐにLANから切り離す、電源は切らないなどの早急な対策をすることも必要である。

質問1 ウィンドウズ使用の際、セキュリティソフトをどうしようか。

もともと入っているアプリで大丈夫か。

回答 ディフェンダーでいいかという、ないよりかもしれませんが、85%の検出率なので、大丈夫でもない。

質問2 攻撃の対象が多岐にわたるようだが。そのためのセキュリティソフトもあるのか。

回答 家庭用のルーターなどが狙われているようである。家庭の家電製品も攻撃の対象になっている。そのための対策ソフトも出るようである。

質問3 アップデートをすると、授業用のソフトが使えなくなったりするのだが。どちらを優先したらよいか。

回答 古いバージョンのアプリを使用することもあるが、不具合があってもアップデートをしてほしいが、セキュリティソフトは最新にして、外部と接続しないようにするなどの対策がある。

質問4 情報セキュリティインシデントというタイトルであったが、入試の時に受験生の名簿などを紙媒体で持っているが、そのような漏洩問題にもCSIRTは対応するのか。

回答 紙も情報セキュリティの範疇なので、対応はする。

2-2 本校におけるセキュリティインシデントの事例

淀 優介氏 情報教育センター（センター長、技術職員）

淀氏より。インシデント関連の事例。メール連絡先へのアクセス承諾によるスパムメールの発生があった。基本的に不要は承諾要求には応じないようにする。学生メールアドレスでの不正アクセス未遂について。学生が自分のパスワードの使いまわしをしていたようである。不審ななりすまし

メールがあった。取引のある業者からメールが来たが、なりすましで送られたものであった。完全に安全な相手から物でも注意。Gメールと行内メールの使い分けをすべき。個人情報を含むものは基本的に校内メールを用いる。Gメールの二段階認証を今後推奨する。

堀内先生より。教職員を対象とした情報セキュリティ講座を受けること。インシデントステッカーをPCに添付してほしい。情報セキュリティ監査の結果の概要紹介。無線LANについて、平成30年度に高専統一ネットワーク更新がある。無線LANのアクセスポイントが40台になるが、予算請求する必要があるため、近いうちに意見を募る予定である。情報教育センターへの依頼はなるべく早めに。グループウェアから申請フォームにて申し込むこと。HDDクラッシャーが情報教育センターのオペレーター室にあるので、PCを廃棄する場合には利用されたい。

3. アンケート集計結果（回収数：79名）

項目1：テーマ設定はいかがでしたか

1：妥当であった 74人 2：妥当ではなかった 1人 3：どちらとも言えない 4人

項目2：第2回FD研修会としての開催時期は適当でしたか

1：適当であった 55人 2：適当ではなかった 14人 3：どちらとも言えない 10人

項目3：全体的な講演内容に興味がありましたか

1：大いに興味をもてた 50人 2：少し興味をもてた 27人

3：あまりもてなかった 2人 4：全くもてなかった 0人

項目4：情報セキュリティとして活かせる内容でしたか

1：大いに活かせる 51人 2：少し活かせる 27人

3：あまり活かさない 1人 4：全く活かさない 0人

項目5：今後このようなテーマ設定の研修会に参加したいと思いますか

1：参加したい 60人 2：参加しない 1人 3：どちらとも言えない 18人

項目6：今回のFD研修会に対して何かご意見がありましたらご記入ください

- ・ALやMCCについての講演を希望します。
- ・何度も書いていますが、定期考査中は採点があるので、やめていただきたい。特に今週の間考査はその間に240枚の採点をしなくてはなりません。ぜひ、開催時期を考えてください。
- ・内容ではないですが、用語解説が入っていれば理解度が比較的低い方にも優しくなるとおもいます。
- ・アクティブラーニング事例についての講演を希望します。
- ・アクティブラーニング、勇気づけ（アドラー心理学）の仕方についての講演を希望します。
- ・教員としての資質を高める研修（心がまえなど）。
- ・試験期間外の開催を希望します。
- ・教育方法に関する研修会をお願いします。
- ・テスト・授業と重複する日程は避けてほしい。
- ・最新情報も大切だが、過去と類似するテーマだとモチベーションが下がる
- ・研究業績向上の研修を希望します。
- ・採点で忙しい。
- ・scansnapとacrobat、ipadの三つで校内業務を効率化、高効果化させた事例と手段を説明できます。これを呼び水に他の方の事例も聞き出せると教員全体のスキルアップに資するかと。
- ・講義ノートの作り方、使い方、授業スライドの作り方、見せ方、授業中に作る資料の配布。
- ・試験答案の管理とエビデンスの効率的な作成法。
- ・教員室の紙ソースの削減、管理、活用。
- ・教育にも校務にも使えるwordあるいはexcelで作るマークシート。

4. むすび

情報セキュリティに関する様々な問題等が発生する中で、まさに適切な時期に適切な今年度の第二回のFD研修会のテーマが選ばれた。研修会終了後に行われたアンケートでは、テーマ設定、同様の研修会への次回参加意欲について特に肯定的な意見が多く、情報セキュリティに対する教員の関心の高さが鮮明に見られる。ほぼ全員の教員が何らかの形で今回の講義内容を授業で活かせると回答しており、内容としても極めて功を奏したものであったと推測される。

後半に行われた本校教職員の発表でも、情報セキュリティに関する具体的な例を目にすることができ、各教職員の個人情報保護への関心がさらに高まったように思われた。

ただ、開催時期に関して否定的な意見も多く、特に試験期間中の開催は今後見直しを検討する必要があるように思われる。また、講義内容に関してはアンケートに見られないような様々な意見も存在すると思われるので、教職員からの希望をさらに聞く努力も必要であるかもしれない。

4-3 平成 28 年度 第 3 回 F D 研修会 実施報告

1. 研修会概要

講師：電気電子工学科 渡辺 誠一 准教授（教育改善委員）
題目：「アクティブラーニングへのアプローチ」
日時：平成 29 年 3 月 23 日（木）10:00～12:10
場所：電子情報工学科棟 5 階 100 番教室
司会：一般科 小林 茂樹 教授
開会挨拶：電子制御工学科 堀内 富雄 教授（教育改善委員長）
参加者数：44 名

2. 講演内容

以下の 3 項目を目標に掲げて講演が行われた。

- ・ アクティブラーニング（AL）の必要性について説明できる
- ・ インストラクショナルデザイン（ID）を用いて明確化された 1 回の授業計画の目標を記述することができる
- ・ 1 回の授業を効果的に進めるため、ガニエの 9 教授事象に基づいた 1 回の授業計画を作成できる

内容は、講演者が平成 28 年 1 月 7 日（木）～（金）に行われた「高専機構 平成 27 年度アクティブラーニングトレーナー教員研修会」（小林茂樹教員と渡辺が参加）、平成 28 年 12 月 21 日（水）～22 日（木）に行われた「高専機構 平成 28 年度インストラクショナルデザイン研修」（渡辺が参加）の内容を踏まえたものとなった。

アクティブラーニングを実施する際にヒントとなる ADDIE モデル、ガニエの 9 教授事象、グループワークの手法、質問技法などを解説した後、参加者にいくつかのワークに取り組んでもらった。最後に、平成 27 年 12 月 14 日（月）に函館高専で行われた「第 2 回アクティブラーニング研究シンポジウム」における授業参観の様子の紹介がされた。

【質疑応答】

Q：学生側から見た「到達目標→授業→到達度評価」の流れはどうなるのか

A：基本的には教員側から見たものと同じだと考えられる

Q：ポートフォリオを学生がちゃんと作ってくれるか心配だ

A：専攻科では作成して、面談などで活用している事例がある

Q：課題分析図は先生用だと思うが、学生に提示しているのか

A：学生には提示していないと思われる

Q：「評価条件」と「合格基準」は同じなのではないか

A：ほぼ同じような内容になるが、「合格基準」は数値を使って明確に示すのが特徴

Q：グループワークをすると班毎で進度が異なる可能性がある。時間が余ったらどうするか

A：新たな課題に挑戦してもらっても良い。（追記：他の班に教えに行っても良い）

Q：グループワークに向かない内容はあるのか

A：基本的にはないと思う。個人ワークを行ってからグループワークに取り組ませると良い

【意見・コメント】

- ・ 課題分析図（ロードマップ）を学生に示した方が良いのでは
- ・ 授業計画表は教育実習で徹底的にやられている
- ・ 学校全体として学生に目的意識を持たせ、将来の目標を見せる仕組みが必要なのでは
- ・ 公式を覚えるのではなく、考え（バックグラウンド）を伝えることが必要なのでは
- ・ 科目自体のデザインが大切

3. アンケート集計結果（回収数：31 名、回収率：70.5%）

項目 1：テーマ設定はいかがでしたか

1：妥当であった 27 人 2：妥当ではなかった 1 人 3：どちらとも言えない 3 人

項目 2：第 3 回 FD 研修会としての開催時期（春季休業中）は適当でしたか

1：適当であった 24 人 2：適当ではなかった 4 人 3：どちらとも言えない 3 人

項目 3：全体的な講演内容に興味がありましたか

1：大いに興味をもてた 18 人 2：少し興味をもてた 11 人

3：あまりもてなかった 2 人 4：全くもてなかった 0 人

項目 4：今後の授業改善に活かせる内容でしたか

1：大いに活かせる 16 人 2：少し活かせる 14 人 3：あまり活かさない 1 人

4：全く活かさない 0人

項目5：今後このようなテーマ設定の研修会に参加したいと思いますか

1：参加したい 19人 2：参加しない 1人 3：どちらとも言えない 11人

項目6：今年度の開催回数（9月，12月，3月の計3回実施）はどうでしたか

1：多い 7人 2：適当であった 24人 3：少ない 0人

項目7：今回のFD研修会に対して何かご意見がありましたらご記入ください（自由記述）

- ・ 実際のモデル授業を見ながら，その後議論したい。
- ・ 要点を絞って短時間で行ってほしい。
- ・ 前年度のアンケート結果を活用する意図として良かったと思う。
- ・ （開催時期に関して）新年度準備には良いが，やや業務も忙しい。
- ・ 研修対象となるのがたくさんあるので，定期的実施して情報共有が必要なので，今後ともよろしくお願いいたします。
- ・ 学校全体で取り組みを増やした方がいいと思うが，参加数が少ないので気になる。
- ・ 特に1年生は90分の授業が嫌である様子なので，メリハリのある授業をする先生が多くなり，楽しく学んでもらいたい。
- ・ 自主性は時間が必要なのではなく「もっと学びたい」という気持ちを授業で味わわせることが必要。そのためには授業で「わかる」「できる」ようにすることが大事。
- ・ やる気のない先生でも「学習目標」と「まとめ」の時間は作れると思うので，作っていただけたらと思います。
- ・ 今回のテーマが一番FD研修会の内容としてはしっくりきました。
- ・ （開催時期に関して）この内容であれば，次年度に反映させるためには12月頃までにやるのが適当ではないか。
- ・ （希望テーマに関して）「障害のある学生の支援について」「成績不振学生の指導について」
- ・ このようなFDをもっとやっていただきたい。第2回ALを希望。
- ・ （希望テーマに関して）「アクティブラーニング」「科研費系」

4. むすび

本研修会では，個人ワークからグループワークに移行する体験と，1回の授業計画を立案する手法について学んでもらった。予定していた内容が時間内に全て終わらなかったのは反省点として残る。

翌日，FD研修会第2部として希望者を募ったところ6名の参加があった。渡辺から4年選択「パワーエレクトロニクス」の授業動画の紹介が，轟教員から「測量学」の授業計画と1年「環境都市工学概論」の授業内容の紹介があった。今後，「長野高専教育研究会」として定期的開催することとなった。校内での授業事例やアクティブラーニングへの取り組み方など，少人数ではあったが情報共有できた点は良かったと思う。

このような教育改善活動が委員会主導で行うのか，草の根的に行う方が良いのかわからないが，今回の研修をきっかけに教育改善の輪が広がることを願う。

【開催概要】

期日：平成29年3月24日（金） 10:00-11:37

場所：電子情報工学科棟 5階 100番教室

出席者：6名

5. 平成 29 年度の活動に向けた各種委員会等への提言

平成 28 年度 各種委員会の活動状況の点検結果、学生との意見交換会、外部評価、卒業生・修了生および企業に対するアンケート調査からの改善内容等の意見をもとに、各種委員会等への提言を以下に示す。

1. 教務委員会への提言

- ①授業評価アンケートについて Web 化されたが、回答者数が著しく低下している。また、複数科目を別途入力する必要がある、その手間から学生は事務的に回答しているという声も聞く。とりまとめの業務効率が上がったかもしれないが、アンケート自体の有用性、効果が大きく失われている。回答者数の確保、各科目に対して有用となるような工夫など、授業評価アンケートのやり方を検討して欲しい。
- ②平成 27 年度分の学習・教育目標達成度自己評価について、分析が行われていない。また、平成 28 年度分のアンケート項目について、より有用となるよう内容を検討するとの事であったが改善がない。アンケート項目と分析方法の検討、結果の分析を行い、PDCA サイクルを継続的に行ってもらいたい。
- ③本科と専攻科の連携が行われていないので、検討が必要と思われる。
- ④コミュニケーション能力、リーダーシップなど人間性教育に関する具体的な方策があまり検討されていないので、検討してもらいたい。

2. 学生支援委員会への提言

- ①教務委員会と連携して、低学年のキャリア教育を充実させる。

3. 寮務委員会への提言

- ①防犯カメラシステムの安定運用
- ②留学生や短期ステイ学生との交流活動
- ③寮生からの相談窓口の充実
- ④登校カードの有効活用

4. 専攻科運営委員会への提言

- ①前年度からの指摘事項である、学習教育目標達成度調査、および学生満足度調査のまとめと分析、有効活用が求められる。

5. 研究支援委員会

- ①外部資金獲得に関する情報提供について一層の充実をお願いしたい。
- ②配分研究費が削減される中、校内予算を活用した研究費支援についてお願いしたい。

6. 広報委員会

- ①従来の広報活動(web ページの充実、科学イベントの実施、県内科学イベント・産業フェアへの参加協力、出前授業、刊行物作成、ノベルティ作成)を継続し、より充実したものにしていく。
- ②個別の広報活動に対する費用(金銭・労力)と効果の定量的な検証
- ③広報活動への外部有識者の登用の検討
- ④他大学の広報活動の調査
- ⑤中学校教員・塾講師への本校のアピール機会設定
- ⑥予算減に対する対応の検討

7. 国際交流センター

- ① 従来の国際交流活動を継続し、より充実したものにしていく。

8. 教育改善委員会

- ①エビデンスの有効活用と保管の電子化の改善について
- ②学習・教育目標の達成度に関する調査の分析・評価の点検
- ③授業改善システムの評価と点検

9. 第三者評価対応委員会

- ①機関別認証評価実施に向けての準備

平成 27 年度学習教育目標達成度自己評価に対する
報告書

平成 28 年 3 月 31 日

長野高専専攻科

専攻科運営委員会

1. 目的

専攻科在学中に学習した科目を自己評価することにより、学習教育目標と科目との関連を理解しつつ、学習教育目標の達成度を点検・評価し、その後の学習に活かすことを目的とする。

また、本報告書は、専攻科を修了する2年間の学習教育目標の達成度について、その結果を示すものである。

2. 実施方法

実施日：平成28年2月19日

入力方法：面談の連絡時に学習・教育到達度調査の記入シートをメールで配信

提出先：面談時に提出

3. 結果の詳細

3.1 連絡文書

専攻科学生には、メールの配信により周知した。

以下にメールの本文を示す。

特別研究発表会の準備を進めていることと思います。

さて、専攻科では年に3回の面談を行っています。今回の面談日は2月19日になっています。添付ファイルの面談スケジュールを確認ください。

面談時には書類を3種類持参してください。

面談当日、記入して持参しもらう書類3つとその参考にしてもらう書類をファイル用のメールに送りますので、確認してください。当日に印刷し、手書きで記入し持参してください。

「自己評価シート」

→参考「H27 デザイン能力対応科目」

「H27 ルーブリック(学生用)」

→参考「学習教育目標科目参考」

(出身学科のシートを見てください)

「到達度調査 (H27-専2年用)」

自己評価シートに関しては今年度受講した科目についてすべて記入してください。

ルーブリックについては例を参照して、丸をつけてください。

到達度調査は自分の対応する専攻のシートを選んでください。

最終の成績がわからない場合、後期の科目に関しては、自分の予想で記入してください。

3. 2 評価シート

専攻科 学習・教育目標到達度調査

平成27年度 生産環境システム専攻2年生用 氏名

大項目	学習・教育目標		授業科目名	単位数	必須・選択などの別	学年・学期	合計時間数(時間)	科目における学習・教育目標の割合	自己点検評価 (到達度を1~5の5段階で評価) ※5が最も到達度がよい			
	大項目の内容	細項目							細項目の内容	修了時		
										科目毎	細項目	大項目
A	世界の政治、経済、産業や文化を理解し、その中で自分が社会に貢献できる役割が何かを討論し、多面的に物事を考え、行動できる素養を持つ。	1	日本文学特論	2	選択	専1・前期	22.5	100				
			技術の日本史	2	選択	専1・前期	22.5	100				
			外国史概論	2	選択	専1・前期	22.5	100				
			理論経済学	2	選択	専2・前期	22.5	100				
		小計										
		2	小計									
B	自然環境や社会の問題に関心を持ち、技術者としての役割と責任について考えを述べる素養を持つ。(技術者倫理)	1	倫理学特論	2	必修	専2・前期	22.5	50				
			小計									
		2	倫理学特論	2	必修	専2・前期	22.5	50				
			小計									
		合計										
		C	機械、電気電子、情報または土木の工学分野(以下「基盤となる工学分野」という。)に必要な数学、自然科学の知識を有し、情報技術に関する基礎知識を習得して活用できる。	1	数理科学I	2	必修選択	専1・前期	22.5	100		
数理科学II	2				必修選択	専2・前期	22.5	100				
物性物理学	2				必修	専1・前期	22.5	100				
統計物理学	2				必修選択	専2・前期	22.5	100				
放電物理学	2				必修選択	専2・前期	22.5	100				
量子物理学	2				必修選択	専2・後期	22.5	100				
物質科学	2				必修	専2・前期	22.5	100				
小計												
2	産業システム工学輪講			2	必修	専2・後期	22.5	10				
	小計											
	合計											
1	基盤となる工学分野において、技術士第一次試験水準の問題に対して解答までのプロセスを示すことができる。	1	情報セキュリティ論	2	選択	専2・前期	22.5	100				
			機械加工学特論	2	必修選択	専1・前期	22.5	60				
			金属熱処理工学	2	必修選択	専2・前期	22.5	70				
			流体力学	2	必修選択	専1・前期	22.5	60				
			小計									
			マイコン応用回路	2	選択	専1・前期	22.5	100				

専攻科 学習・教育目標到達度調査

平成27年度 生産環境システム専攻2年生用 氏名

大項目	学習・教育目標		授業科目名	単位数	必須、選択などの別	学年・学期	合計時間数(時間)	科目における学習・教育目標の割合	自己点検評価 (到達度を1~5の5段階で評価) ※5が最も到達度がよい			
	大項目の内容	細項目							細項目の内容	修了時		
										科目毎	細項目	大項目
D	活用できる。	2	基礎となる工学分野において、習得した知識を組み合わせて、問題解決のために応用できる。	生体情報工学	2	選択	専1・前期	22.5	100			
				応用論理回路設計	2	選択	専2・前期	22.5	100			
				マイコン応用	2	選択	専2・後期	22.5	100			
				知識工学	2	選択	専1・前期	22.5	100			
				産業システム工学概論	2	必修	専2・後期	22.5	20			
				特別研究I	3	必修	専1・通年	135	60			
				特別研究II	8	必修	専2・通年	360	60			
				学外実習	12	必修	専1・後期	540	10			
				材料強度学特論	2	必修選択	専1・前期	22.5	40			
				金属熱処理工学	2	必修選択	専2・前期	22.5	30			
				流体力学	2	必修選択	専1・前期	22.5	40			
			小計									
D	基礎となる工学分野およびその基礎となる科学、技術の知識と技能を習得して必要とされる技術上の問題に活用できる。	12	基礎となる工学分野において、技術士第一次試験水準の問題に対して解答までのプロセスを示すことができる。基礎となる工学分野の知識や技能と、他の工学分野の知識を効果的に併せて、課題の解決に利用できる。	計測制御工学	2	選択	専1・前期	22.5	100			
				信号処理論	2	選択	専2・前期	22.5	100			
				構造材料力学	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				応用設計工学	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				応用電気工学	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				高周波回路工学	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				地盤工学特論	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				交通システム計画	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				計算力学特論	2	必修選択	専2・前期	22.5	100			
				振動・騒音工学	2	必修選択	専2・後期	22.5	100			
				環境保全工学	2	必修選択	専2・前期	22.5	100			
				都市デザイン	2	必修選択	専2・後期	22.5	100			
				加工プロセス特論	2	必修選択	専2・後期	22.5	100			
				ロボット応用工学	2	必修選択	専2・後期	22.5	100			
				エネルギー工学	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				材料科学	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				自動化システム工学	2	必修選択	専2・前期	22.5	100			
				水環境工学	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
				土質工学特論	2	必修選択	専1・前期	22.5	100			
			小計									
		3	基礎となる工学分野の知識や技能と、他の工学分野の知識を効果的に併せて、課題の解決に利用できる。	産業システム工学概論	2	必修	専1・前期	22.5	100			
				産業システム工学概論	2	必修	専2・後期	22.5	40			
				実習工学演習	1	必修	専1・通年	22.5	70			

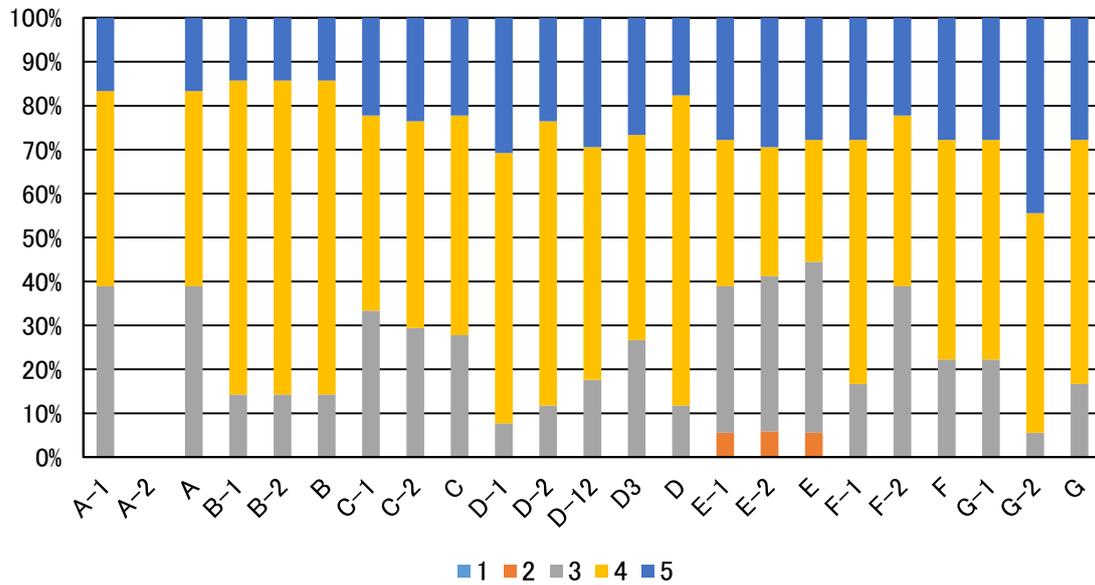
4. 結果

4. 1 生産環境システム専攻

生産環境システム専攻の学生 18 名について、学習教育目標に対する学生の自己達成度評価の頻度分布を示す。各色の番号は、達成度を示す。各棒グラフの上から 5、4、3、2、1 の順番である。数値のレベルは、おおよそ、以下の通りである。

5：十分達成できた、4：達成できた、3：ほぼ達成できた、2：あまり達成できていない、1：達成できていない。

平成27年度生産環境システム専攻2年生

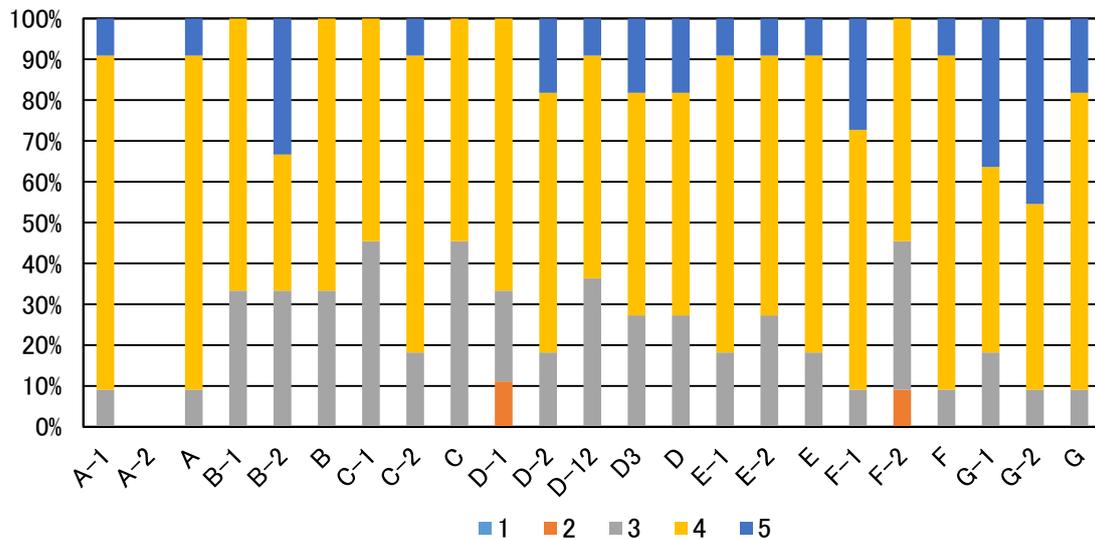


4. 2 電気情報システム専攻

電気情報システム専攻の学生 11 名について、学習教育目標に対する学生の自己達成度評価の頻度分布を示す。達成度の評価は 5 段階で調査し、グラフには以下のような色でその評価段階を表している。

- 5：十分達成できた（青色）、4：達成できた（黄色）、3 ほぼ達成できた（灰色）、
- 2：あまり達成できていない（橙色）、1：達成できていない（水色）。

平成27年度電気情報システム専攻2年生



5. 考察

5. 1 生産環境システム専攻

(1) 全ての学習教育目標の細項目に関して、5割以上がほぼ達成できたと評価している。あまり達成できていない細項目は、学習教育目標 E にわずか見られた。ただし、10%以下であり、ほとんどの学生が達成できたと考えている。

(2) 十分達成できたと評価した項目は、C-1、C-2、D-1、D-12、E-1、E-2、E-1、E-1、F-1、F-2、G-1 および G-2 の項目で 20%に以上満足していることが分かる。G-2 は、4割以上の学生が十分達成できたと評価としており、充実した学外実習だったことを示している。

(3) 気になることとして、F-1、G-1 について十分達成できたと評価した割合が G-2 より低いことがあげられる。考えられる理由として、平成 26 年度入学生から特例適用専攻科に認定されたことによって、特別研究 I から特別研究 II になる際に指導教員と研究テーマの変更を余儀なくされた学生が 6 名おり、それらの学生は他の学生に比べて研究に費やせる時間が短かったことからこのような結果になったのであろう。

5. 2 電気情報システム専攻

(1) 全ての学習教育目標の細項目に関して、ほぼ10割近い学生が「ほぼ達成できた」と非常に高い評価をしている。延べ人数で2名の学生が「あまり達成できていない」という評価を学習教育目標 D-1 およびF-2 で下しているだけである。

(2) 「十分達成できた」と評価した項目は、A-1、B-2、C-2、D-2、D12、D-3、E-1、E-2、F-1、G-1 および G-2 であり、十分に満足していることが分かる。特に、習得した工学分野の知識を基に、課題の発見とその遂行する能力を身につけるという総合的な項目の G において、3～4割以上の学生が十分達成できたと評価としている。

(3) 延べ人数で2名の学生が「あまり達成できていない」という評価がされた学習教育目標 D-1 およびF-2 では、「十分達成できた」と評価する学生もいない状況である。この技術士1次試験を確実に解答できる能力や英語によるコミュニケーション能力の強化について、今後カリキュラム等を検討する必要があるかもしれない。

平成 28 年度第 1 回学生との意見交換会 議事録

学生支援委員会

1. 開催日時および場所、参加者

日 時：平成 28 年 10 月 5 日（火） 14:25～16:10

場 所：図書館 2 階 視聴覚室

参加者：学生 14 名（学生会 13 名、他学生 1 名）、教職員 21 名（校長、教員 13 名、学生課職員 7 名）

2. 学校長あいさつ

ざっくばらんに言っていただいて、学校としても学生が何を考えているのか、どう教えていくのか考えていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。忌憚ない意見を下さい。

3. 出席者あいさつ

参加した教職員の紹介を行った（司会が参加者を紹介）。

4. 意見交換の概要（司会進行：渡辺 学生主事補）

(1) 教育について

学生：電子情報工学科 2 年「電気回路」が半期で授業のスピードが早く、詰込みになっている。

教員：従来 3 年半期で実施していた科目が 2 年半期になっただけである。電子情報工学科で取り扱う電気回路の範囲は狭い。いつでも質問してほしい。

教員：2 年生で理解できる内容か確認してみたい。

学生：学修単位が多くなった。今後の方針はどうなっているのか。

教員：4、5 年生の科目はかなり増やした。実施可能な科目は検討していきたい。

学生：授業のスピードが早くなったとは思わない。ただ、通年科目が半期科目になっている。

教員：家庭学習をしてほしい。

教員：自宅で学習するから（授業は）短くて良い。

学生：選択科目について、授業内容がわからないまま選択する形になる。テストの返却、および成績が夏季自主研修期間後になったのはなぜか。

教員：テストの返却が後になったのはまれなケースである。成績表については補習などが実施できるように成績提出日を 9/20 にしたため、自主研修期間後になった。

(2) 教育環境（学生支援、施設・設備）について

学生：軽音楽部の部室だけでなく吹奏楽部の部室も新しくしてほしい。温度差がひどく、スプリンクラー使用時に雨漏りがする。夏場は防音で窓を閉めると熱くなる。音漏れもひどく、風が吹くと壁が揺れる。床も揺れるし、壁から草も生えている。配線もむき出しになっている。窓を開けると蜂が入ってくるので網戸を付けてほしい。

教員：状況を確認していただき、顧問の先生を通じて学生係に知らせてほしい。修繕台帳に掲載されていない可能性がある。予算が絡む話なのでいつ改修できるか約束はできない（10/6 修繕台帳には雨漏りについて未掲載であることを確認、10/7 学生、顧問、施設係職員と現場を確認済み）。

学生：ロボコンプロジェクトで使用している予算を（部室の改修に）回せないか。

教員：ロボコンは高専のイメージと結びついていて、広報も兼ねている。学校の名誉にもつながっている。

学生：プロジェクトの位置付けをしっかりとしてほしい。22 時位まで活動している日もある。

教員：学生から見ると部活動に見えると思う。活動時間が伸びる場合には申請してもらい、許可して活動してもらっている。

教員：活動時間が延長になる場合には教員が立ち会っている。

学生：(活動時間延長の) 許可を出していることをわかるようにしてほしい。

教員：学生玄関などに掲示する方法を検討したい。

教員：ロボコンは他のクラブとちょっと違う。(地区大会主幹校となる) 29年度まではこの体制でいきたい。

学生：工嶺祭が今年度から半日減った。休みが増えたのに工嶺祭の日程が短くなったのはなぜか。

教員：今までは1週間やっていた。1週間勉強しないのはどうか。工嶺祭をなくそうとは考えていない。中夜祭は昔はやっていなかったなので、今年から元の状態に戻ただけである。

(3) 事務部への要望

学生：選択科目の変更期間が1週間と短い。授業を受けてみて決めたい。

教員：事務部ではなく教務委員会で決定した。平成27年度は変更期間が1か月間あった。授業の初回にガイダンスをするなど授業を工夫するなどしてみたい。

学生：休日に施設を使おうとして学生係へ書類(施設使用願)を提出したが、後に誤りがわかり再提出をしたところ、警備員の方に伝わっておらず、施設を使用することができなかった。警備員の方とどういうやり取りをされているのか。

職員：学生係に提出してもらった書類は学生主事などの決済を経て許可がされ、警備員に写しを渡している。今回は写しが渡っていなかった可能性がある。

教員：休日の施設使用で何かあれば指導教員に相談してみるのも良い。

学生：私事旅行のため学割を請求した際、1枚で往復分使えるという説明があり、1枚のみ発行があったが、往復の日が開いたため、復路分について学割を使えなかったことがある。

職員：職員側の理解不足があった。請求時に十分確認するようにする。

(4) その他

教員：(学生からの) 要望を受け付けるシステムができないか。

教員：「メール目安箱」があるが、学生に知られていないかもしれない。

5. まとめ(奥村学生主事)

みなさん有難うございました。非常に率直な意見や質問をいただき、我々も勉強になりました。感じたことは、意見を吸い上げる方法、部活の顧問の先生や担任の先生とかに直接話せば済むようなこともあり、学生側と学校側のコミュニケーションが不足していると感じがしました。この場でぜひ出さなくても、あるいはメール目安箱を使わなくても解決できるものもたくさんある。学校は学校側の教職員と学生と協力して作り上げていくものだと思うので、ぜひ協力してやっていきたい。

所 感

- ・ 意見交換会は5月30日に学生会長から学校長へ提出された「学校への意見・質問アンケートの集計結果」をベースに進めた。学生側にも意見を出す際には理由や具体案も添えて質問や要望をすることを期待したい。
- ・ 集計結果の前文に「毎回、学校からの回答で「要検討」「要望は理解した」など、その場しのぎの回答が見受けられ、その後も具体的な回答が決まらずに、そのままになっていることがあります。」とあったが、丁寧に回答書が作成できて良かった。フォローアップの方法について検討したい。
- ・ ロボコンプロジェクトに関する質問が多かった。ロボコンプロジェクトには学内へ理解を求める努力と結果を期待したい。

- アンケート結果や意見交換会で出た施設に関する話題から、学生と教職員の連携が取れていないことが解った。特に学級担任や課外活動の指導教員は学生と密に連携を取ることを期待したい。
- 「メール目安箱」の周知を教育改善委員会に依頼したい。
- 一般学生への周知が遅れて学生の参加者数が少なかった。次回は大勢になることを期待したい。
- 学生会長から、次回は1月頃に工嶺祭に関する意見交換会を実施したいとの話があった。

(文責 学生会担当 渡辺誠一)

平成 29 年 2 月 17 日
意見交換会担当 轟

平成 28 年度 専攻科生意見交換会開催報告（案）

1. 開催目的

在学学生と教育・研究環境、専攻科カリキュラム等に関して意見交換を行うことで、今後の教育改善に役立てることを目的とする。

2. 開催日時・場所

平成 29 年 2 月 17 日（金）12:50～14:20

視聴覚室（図書館 2 階）

3. 出席者

教職員：専攻科長、AP・AE 専攻長、専攻科運営委員

学生課課長補佐および副校長（研究・地域連携担当）

学 生：1 年生（全 26 名中 20 名）、2 年生（全 26 名中 25 名） 合計 45 名

※専攻科 1 年生は就職活動の関係での欠席が多かった。その他は体調不良など。

4. 意見交換内容

1) 開会挨拶【専攻科長】

2) 意見交換

学校教育に関する全般

(1) アンケートについて（集計結果の提示と質疑応答および回答）

(2) 教育カリキュラムおよび教育・研究環境について意見交換

(3) 学校行事等その他について意見交換

3) 閉会挨拶【専攻科長】

5. 専攻科生からの要望

※自由意見にて出されたもののみ記載。その他要望は、意見交換会当日配布資料参照のこと。

(1) 研究

- ・特別研究の計画書や報告書について、指定フォーマットに赤字が多く、どこが重要なのか不明確。さらに仮提出が多く、どのタイミングでどの程度のものを提出すれば良いのか不明で、混乱する。
(回答) フォーマットが混乱を招くようなものであれば、修正・改善していく。また、提出・仮提出についても、効率化を目指す。
(課題・検討) 特別研究計画書ならびに報告書のフォーマットの整理と提出ルールの明確化。

(2) 施設および設備

- ・共用室の使用ならびに物品の管理方法について、情報の共有不足。
(回答) 専攻科生の中で情報交換し、役割分担することや整理整頓を心掛けていくことが重要。
(課題・検討) 専攻科生(1年生と2年生)で情報交換する場がない。我々の範疇ではないか?

(3) 講義

- ・休講・補講の連絡手段として、学生玄関・専攻科棟玄関、HPでの開示を知らなかった。
(回答) 周知不足であった。ガイダンス等を使って周知する方法を模索する。
(課題・検討) 年度当初に授業の連絡は掲示される旨を伝える。
- ・輪講時の課題について、指導教員より提示される課題に不公平感がある。
(回答) 現状では、各指導教員に任せているところもある。基準の明確化を検討。
(課題・検討) 「目安として6~8頁」としているが、「6頁以上」などの一定以上の基準を設けるか。
- ・輪講時のプレゼンテーションについて、多くの学生は専門外であるため、研究背景や意義も分からないまま、専門的な説明をされても理解が進まない。
(回答) 今後、冒頭に全体を俯瞰しての背景等を入れるなどして工夫していくことを検討。
(課題・検討) 課題の内容だけでなく、その研究が必要な背景などの説明を加えるように指導。
- ・輪講時の課題について特別研究と関連していない例が見受けられた。
(回答) 本来は関連性をもってやってもらうことを期待している。実施要領に明記することを検討。
(課題・検討) 提示課題について課題の容量の他に、研究との関連性を持たせるよう依頼する。

(4) 進路

- ・就活情報など他高専との情報共有できる仕組みができないか。今年度、取ろうと思ったが学校側から十分な協力が得られなかった。
(回答) 高専間の連携は、各高専の考え方もあるので難しい点もある。個人レベルの繋がりでの情報交換できることもあるので、教員にどんどん相談してほしい。
(課題・検討) 面談時等に個別フォローしていく。

(5) その他

- ・教員の不和について、教員による陰口が聞かれることもあった。組織全体で話し合う環境づくりが重要であるし、風通しの良い組織を望む(それが社会人として、組織としての健全な姿だと思う)。専攻科もそうであってほしい。
(回答) 教員の不和によって、多々迷惑をかけた点は反省しなければならない。次年度に向けて情報共有が図れるような体制づくりを目指していく。
(課題・検討) 学生の不満、不安、不信につながらない専攻科運営委員会のあり方を検討していく。
- ・上記のほか、専攻科2年生から就職や進学のアドバイス、専攻科棟共用室の使用のルール、学校行事(工嶺祭など)の参加に関する留意事項等について意見交換が学生間でされた。

以上

第 12 回長野工業高等専門学校参与会議事概要

日 時 平成 28 年 2 月 1 日(月) 13:30～16:00

場 所 長野工業高等専門学校 第一会議室

出席者

参与：半田志郎参与(会長), 竹内裕治様(近藤守参与の代理), 倉島浩様(上原卓参与の代理), 池田明参与, 小根山克雄参与, 水本正俊参与, 中村天昭参与, 山岸晴美参与
 本校：黒田孝春(校長), 小澤志朗(副校長(総務主事))/第三者評価対応委員会委員長), 押田京一(副校長(教務主事)), 永藤壽宮(副校長(寮務主事)), 長坂明彦(副校長(専攻科長)), 楡井雅巳(副校長(研究・地域連携担当)/地域共同センター長), 戸谷順信(学科長(機械工学科)), 大澤幸造(学科長(電気電子工学科)), 堀口勝三(小野伸幸(学科長(電子制御工学科)/技術教育センター長)の代理), 荒井善昭(学科長(電子情報工学科)), 遠藤典男(学科長(環境都市工学科)), 小林茂樹(学科長(一般科)/図書館長), 堀内泰輔(情報教育センター長), 星操(事務部長), 須磨宏信(総務課長), 富岡裕(学生課長)
 (オブザーバー)
 小池博明(濱口直樹(副学科長(一般科))の代理), 鈴木宏(第三者評価対応委員会副委員長), 和田一秀(技術支援部技術長), 山田隆(総務課課長補佐(総務担当)), 小林考行(総務課課長補佐(財務担当)), 中村正一(学生課課長補佐), 諏訪修一(総務課総務係長), 佐藤優(総務課総務係員)

欠席者

参与：堀井正子参与
 本校：奥村信彦(副校長(学生主事))

1. 開会

総務課長の進行により開会された。

2. 校長あいさつ

校長から、高専を取り巻く状況について報告があった。引き続き、本会のテーマである「教育の改善に関する取組み」について、卒業生のアンケート調査を実施したので、卒業生の現状、卒業生らの意見を反映して改善に努める所存である。調査結果については分析

を行っているところであるが、ある程度紹介させていただくのでご意見を賜りたい。

また、学事暦とカリキュラムの改訂を進めており、高専も第三期の中期計画となり、卒業し社会人となったときにどのような力が必要か。在学中に身に付け、主体的に動き、そして、物事を考え、新たな物づくりを行う。いろいろな課題に向き合って、その中で課題を自ら解決していく。そして日本に留まらず世界で闘える人材を育てたい。そういう想いで、学事暦、カリキュラムを、見直しているところである。本日は本校の入口から出口まで、地域社会の代表としてお集まりいただいた参与の皆様と情報交換をさせていただくとともに、将来に向けた率直な意見を賜りたいとのあいさつがあった。

3. 会長・副会長紹介

総務課長から、参与会設置要項第6条第1項に基づき、参与会会長に半田志郎参与を、副会長に中村天昭参与を指名させていただく旨紹介があった。

4. 自己紹介(本校出席者・各参与)

本校出席者に続き、各参与から自己紹介があった。

5. 配付資料確認

総務課長から、配付資料の確認があった。

6. 会長あいさつ

半田会長から、大学も改革を迫られており、信州大学工学部も、4月から新しい学科構成となる大幅な改組を行った。その折、文部科学省との折衝の中で、大学より高専の方が役に立っているのではないかというような発言があり、反省も少しあったので、役に立つ、社会貢献のできる大学生を育てる。役に立つというところを強く押し出す形で改組をやらせていただいた。高専は、社会から見ると役に立っているという意味では良いところが沢山あると思うが、一方、足りないところもあるということも聞いており、今日の議論の中で詰めたいので、各参与から忌憚のない意見を伺いたいとのあいさつがあった。

以下、参与会設置要項第7条第1項の規定により半田会長が議長となり、議事が進行された。

7. 議事

テーマ：長野高専における教育の改善に関する取組みについて

1) 卒業生アンケートの集計結果について

小澤副校長及び楡井副校長から、配付資料No.1 に基づき、説明があった。引き続き、以下のとおり質疑応答が行われた。

中村副会長：調査対象者の年齢は 27 歳から 59 歳だが、全体で何人ぐらいか。回答者のうち、どの世代が多い、どの世代が少ないというようなデータはあるのか。

小澤副校長：手元にはないが、今後集計する。

校長：調査対象者は、対象とする卒業生の 5 分の 1 か 6 分の 1 ぐらいである。回答者 275 名、回答率 30.6% と言う数字は、他高専のアンケートより回収率が良い。調査結果での最終学歴は、専攻科 3.3%、大学 12.4% だが、現在は合せて大体 50% ぐらいである。専攻科設置以前の方の回収数が多いのは母数から当然で、大体、平均的にはそれぞれの学年では回答があったと思う。専攻科設置、大学編入学制度創設等で母集団の違いがあるので、今後、集計・分析を待ちたい。また、5 ページでは、分類の仕方が難しいと思うが、高専在学中の生活に関してネガティブな回答に分類されているが、必ずしも中退はネガティブではなく、将来を見詰めて進路変更することもあり、高専も大きな役割を果たしている。これも分析を待ちたい。

池田参与：どのように教育を改善するかという観点で見ると、過去を調べて未来を知ることとも大事であるが、これからはどういう時代が来るのか、これからどうなるのか、こういうことが必要になるということが重要ではないか。今まで、高専は中堅技術者の養成学校であったので、生産技術あるいは製造技術という作るプロセスの改善が主体だったのではないか。日本の独自商品、ブランド、新しい市場、用途開発ということが重要ではないか。そういう観点がこのアンケートから見えて来ないので、もう一つ、何かを追加して、それから教育の改善を行う方が良いのではないか。

校長：その点も含め、問 44 及び 45 (17 ページ) の自由記述に期待している。卒業生が、自分の経験を振り返って、今後、高専はどうあるべきかというご意見をいろいろといただいているので、今後の分析を待ちたい。

2) 学事暦の変更及びカリキュラムの改訂について

押田副校長から、配付資料No.2 及び 3 に基づき、説明があった。引き続き、以下のとおり質疑応答が行われた。

半田会長：30 時間 1 単位のところを 2 単位化するという事は、あと 1 単位分は自分で勉

強してもらおうということになると思うが、教員の意識改革が必要ではないか。

押田副校長：やはり我々の意識改革が重要だと思う。これまで高専は手とり足とりやってきた部分があり、我々の意識を改革して、すぐに教えたり、回答を言ったりせずに、間違ってもいいから自分で考え解答を見つけさせるように意識を変えないといけない。

小根山参与：キャリア教育とあるが、学生が自主的に学んで単位になるということは自主的な人材を育成するという意味でも大変良いと思うが、キャリアデザイン、キャリア演習、海外研修などでは、実習を行う大学、国などは想定しているのか。

押田副校長：シラバスに条件を明記するが、その条件に当てはまるものであれば形は問わないことにしたいと思っている。現在提携している学校以外の学校でも、学生がレポートを書いて、担当の教員、さらに取りまとめ教員が評価し、最後に単位を認定するというようにしたい。

小根山参与：海外研修というのは、一定の期間を指定するのか。例えば半年とか。

押田副校長：学習単位となり 30 時間を 1 単位とするので、例えば海外研修に 1 週間行って何時間となる。1 年生から 5 年生まで、積み上げていき単位になるということになる。海外研修、海外インターンシップ、見学、学会出席などを全部対象としたいと思っている。

半田会長：海外研修では、結構費用がかかるが、補助はあるのか。

小澤副校長：現状では、4 年生が台湾、香港に、専攻科生は台湾、タイに行っている。長期間の場合は、ここ数年 JASSO から奨学金をいただき充てているが、今年の専攻科生の海外インターンシップは 3 カ月であったが、自費でも参加したいという学生が数名いた。

半田会長：外国の大学は、海外からの留学生の受け入れにとっても便宜を図ってくれ、寮がかなり空いており、安価で泊まれるようになっている。それに引きかえ、日本は、大変かかるので、我々も寮をうまく整備しないと交流ができないので、行く方はいいけれど、迎えることができないという部分が苦労している。

小澤副校長：長期インターンシップの際は、県内企業に住居のことなど支援していただいている。

半田会長：海外に一度行った学生は、その後、すごく積極的になるということは、よく見ているので、この取り組みというのはすばらしい。

中村副会長：キャリアデザインとキャリア演習というのは、具体的にどういうことか。

押田副校長：キャリアデザインは、例えば地域共同テクノセンターで出展している産業展の見学、講演会の出席などである。キャリア演習はインターンシップが中心で、現在 4

年生しかインターンシップがないので、それ以外の学年でも単位を与えようというものである。授業科目は多い方がいいと思いつけてある。

中村副会長：非常にいいことだと思う。難しい点があると思うが、評価はきちんとした方がいい。

押田副校長：今年から既に少し違った形であるが始めている。「ルービック評価」と言うのだが、評価項目をきちんと作り、担当教員がそれに従ってレポートをきちんと評価して単位を与えることになっている。

校長：やりたいことは何かというと、やはり教える教育から自分で学ぶ教育への質的転換で、こちらからテーマを与えずに、学生が何をやりたいのか、自分で計画し、実行し、評価して、レポートにまとめるという一連の流れをさせて、それを教員が最終的に評価していく。場合によってはプレゼンの場で総合評価でもいい。また、学生達が投票して点数をつけることもいいかと思う。

池田参与：そこで指導が入ると一番良いのではないか。我々も社長塾のようなことをやるのだが。やはりまずはやる気がないと駄目だけれども、やはりそこに指導が入ると結構いい成果が出る。教える側は相当大変だ。口を出し過ぎると駄目だが、壁の乗り越え方を教えてあげないと駄目だから、そこら辺が勘どころだと思う。

校長：継続できる方式を考えたい。

半田会長：信大ではプレゼンテーションを最後にやらせる。その中で、教員に意見を言ってもらっているが、それが一部指導になっているかと思う。

池田参与：途中で、1回入れた方がいい。途中で入ると、そうか、こういうところに気をつけてやろうとなる。

半田会長：インターンシップでもそうだが、事前教育があって、最後に事後教育ではないが、プレゼンテーションをやって議論すると、かなり効果的だというふうに感じている。そのために、わざわざ特任の先生をお雇いして、企業の方からやっていただくということもある。

池田参与：やはりプランニング力というのは教えていないから、それを自由にやらせると、未熟なプランニング力の成果で評価してしまうというのは、何かもったいない気がする。

3) 意見交換

半田会長から、これまでの説明及び報告等に対する意見並びに総括的な意見が求められ、以下のとおり意見交換が行われた。

半田会長：アンケート調査から議論を進めたい。このアンケート調査は、かなり評価が高いように思えるが、これはちょっと評価が低いというような部分があったら、説明をお願いしたい。

小澤副校長：問 5（5 ページ）で、あまり熱心に取り組まなかったものとして、「人文社会系の一般教育科目」、「英語の学習」などが気になった。その裏返しで、問 41（16 ページ）で、もっと熱心に取り組んでおけば良かったというところに表れているのではないか。また、問 12（7 ページ）で、高専在学中の生活に関して、肯定的なものはあったが、そうでないものは、「高専を中退して他の学校等に進路変更しようと思えば考えた」、「授業、課題が多くて大変だった」というところが多かった。それから、中だるみである。本科でいうと 2 年の後半から 3 年ぐらいであろうか。5 年間であり、高校であればスポーツでも 3 年間で成果を出さなければという気持ちになるが、その辺がネガティブな面だろうか。

半田会長：そう思う。人文社会系の一般教育科目をもうちょっと勉強したかったということとは、カリキュラムがかなり少ないということか。

小澤副校長：やや少ないかもしれないが、やはり苦手意識を持っている学生が多いのではないか。

半田会長：最近、大学生もそういう傾向があり、一般教養で科目を指定しないと、理系の学生は理系の科目ばかりとる。人文系の人生を考えると、そういったことはあまりやらない。これは受験勉強の影響ということも若干あるような気がする。

池田参与：一般教養は 5 年間のうちのどこかで履修すれば良いということにすれば、専門学校で専門科目を勉強しに来たのに一般教養しかやらせてくれないのかということもない。卒業までに修得すればよいというのはいかがか。

半田会長：それはいい考えだ。実は、我々のころもそれを志向したが。

山岸参与：昨日、TOEIC の試験があり、息子も大学編入学を考えているので、当然、受けたが、高校生の妹と同じ問題集を解いたところ、妹の方が高得点であった。単に息子が勉強不足なのであるが、やはり進学校との違いを、親としても実感した。また、本校では、最近 TOEIC を受けるように勧めているが、就職、大学編入学を問わず、TOEIC を受けることによって英語の学習意欲が高まるので、早期に受けるよう指導をすると良いのではないか。

半田会長：ご意見は、大学の教育にも言えることで、信州大学工学部でも 1 年生から TOEIC を必修にしている。入学時に受験料を徴収し、1 年生及び 2 年生と 2 回受けさせている。

文部科学省が言っている、例えば 550 点とらないと卒業できないようにしなさいという
ようなことまでやるとちょっと角が立つと思うが。また、5 年間で修得すれば良いとい
うことは大賛成で、高年次になって履修する人文系の科目というのはすごく大事である。
1 年生で履修する人文系の科目と、技術をある程度理解したうえで人文系の科目を履修
するというのは全然意味が違う。

小根山参与：アンケートでは、専門書は読んだけれど、純文学は全然読まなかった。教養
書もほとんど読まなかったと回答がある。また、英語はもっと学習すればよかった。今、
学校へ通って資格を取ろうとしているという回答もある。狭い世界にはまらない人間育
成の部分で、校長も主体的に自分で考えて行動する生徒を育成したいと言われたが、期
待をしたい。また、フィリピンは日本より開発力も低い、公用語が英語で識字率も高
く、非常に海外志向が強い。やはり英語力があるから海外に出ていけるという、非常に
積極性のある人間が育っていくと思うので、是非そういう方向にして欲しい。最近の就
職してくる学生を見ると、自分で考えて行動するというのは苦手、あまり得意じゃない。
成績は優秀で、面接のテクニックはなかなか長けていてうまいけれども、入社すると、
言われたことはやるけれど、自分からやろうとしない学生が非常に多くて、特に男子学
生にその傾向がやや強くて、そういう意味では将来の不安を感じる、その辺も含め
てカリキュラムの変更をやっていただきたい。

校長：学校要覧（22 ページ）にも、一般科目の全学科共通のカリキュラムが掲載してある
が、意見を聞きながら、設計をやり直したいと思う。また、そういう問題は、多分、ア
クティブ・ラーニングが非常にふさわしい。グループ学習などで議論する環境も作りや
すい。語学教育では、現在、中国語、ハングルを行っているが、スペイン語など他にも
あるが、テレビ、ラジオでもできる。資格試験もあるのでやろうと思えばできるので、
本校で全部の語学を用意することもない。何が欠けているのか、皆さんの客観的なご意
見を頂きたい。

池田参与：そういう意味で、消耗品絡みのところが欲しい。機械を売った後に消耗品がつ
いてくる。化学などがないと、売りっぱなしはなかなか難しい。エクセレントカンパニ
ーは、大体、消耗品が 3 割以上持っているということは分析上ある。そうすると、化学が強い人
がもう少し欲しいという感じがする。

中村副会長：一般科目を見ると、生物、植物、昆虫など、信州大学理学部でやっているよ
うな生物がない。一般科目の中の選択科目で、5 年間の中で。選べるような道をつけて
いただきたい。トンボのような航空力学を考えて、こういうロボットを考える場合に、

やはり生物のことを知っていないと全然だめという考え方を、現在、持っている。

校長：まさに、今、昆虫がロボットのターゲットになっている。

倉島様：専門性をいろいろな角度から学べる場というのはすごく必要だと思う。加えて、自戒を込めて、日頃思うことであるが、私ども、「工業技術総合センター」という技術のセクションを持っている。専門知識をしっかりと持っているということが大前提としてあるが、最近、技術を世間にわかっていただく。いろいろな機関との連携をしていく中で、専門の担当者同士で会話をするには技術力がないと駄目だが、意外と、技術について、あまり知識のない方にも、その技術のすばらしさ、何を訴えたいのか、咀嚼してプレゼンしなければならない場面が結構ある。よく知事からも、非常にわかりづらい、専門用語で何を言っているかわからないと、怒られることがあるが、技術が深まれば深まるほど、わかりやすく伝達していく、プレゼンというようノウハウを、脳が若いうちから、身に付けておくと、時と場合によってうまく使い分けできて良いのではないか。

半田会長：高専は、高校と短大が一緒になったところと捉えていたので、高校と同様の授業科目があると思っていたが、ない科目がある。例えば生物、選択である。そう考えると、選択科目として入っていればいいんだろうが、全部、必修でやる必要はないというところで言うと、選択科目が少し少ないと感じる。先生の数も大変であろうから、簡単に全部入れるわけにはいかないとは思いますが、選択の幅を少し広げてはどうかという気がする。

水本参与：難しい。選択科目を作ると、先生がまた必要になる。

半田会長：だから、そう簡単に言えない。

水本参与：高専というのは、そもそも目的は何かということになると、絞らざるを得ない。

半田会長：絞らなくちゃいけないからこうなっているというのは感じるが、アクティブ・ラーニングあるいは自主性という言葉が出てきているが、これがあれば全て解決する。

文学もおもしろいと思ったら本は読む。私、高校生の中には全く本を読まない学生だった。理系で、国語、社会は大嫌いということで、本は全く読まなかった。ところが、大学に入学し、文学、国文学という授業を受けたときに、先生が楽しそうに授業の中で歌を歌いながら、島崎藤村を語っている。文学とはこんなにおもしろいのかと思い、一生懸命で本を読み出した。そういう経験、きっかけがあれば本を読むのではないか。きっかけさえ与えてもらえれば、授業がなくても文学は読めるという気がしている。そのきっかけに授業がなれば一番いい。また、そのバランスをうまくとっていただきたい。

池田参与：スマホの普及も関連があるのか。これからますます普及するであろうし、

「IoT」といわれるように、家庭の中にも、風呂、湯沸かしなどもスマホでできるという時代になり、この辺もそろそろやらないといけない。

半田会長：なかなか大学でも難しい問題があり、最先端のことを教えようとする、基礎を教える部分が少なくなりなかなかできない。我々としては、やはりスマホみたいなものを教えるということは、ちょっとやりたくないが、「IoT」の概念ぐらいは教えなくてはいけない。

校長：昨今、コンペ、コンテストが沢山ある。学生がそういうことに興味を持てば、チャレンジしていける環境はある。昨年、学生が、手が不自由な方の器具を開発し、福祉機器コンテストで賞を受賞している。

池田参与：もうそろそろ、ロボコンもいいが、次の何か出てきてほしい。

小澤副校長：プログラミングコンテストというのも、もうやっている。

池田参与：そういう意味では、両方兼ねたものもいい。そういう意味でのものづくりである。

半田会長：そういうことを考えて、信州大学工学部は、電気電子工学科と情報工学科を一緒にし、電子情報システム工学科とする。今、コンピュータだけ、回路だけでは駄目で、両方がわかって両方できる人を志向した。それがいいのか悪いのかは別にして、同じ学科にすることにより、片方を意識しながら片方ができるというパターンを作りたかった。170人という大きな学科になるので運営が難しい。

池田参与：やはりセンサー活用技術などが、相当発達しそうだ。

半田会長：そういうこともあり、どう作るかよりもこれから何を作るのかという点を見据えたが、なかなか難しく、教育でできるものとできないものがあるが、そのように学科の作りを変えるということで、良いと思ったことをやるしかない。吉と出るか凶と出るかわからないが。

また、アクティブ・ラーニングではないが、学生が未来を予測できるような学生になって、これからはこれだと思ったら、そこに行けるような教育体系をとるのが一番良い。学科の中でも、最初はこれを選んだが、これは大事だと思ったら、そんなに苦労しなくてもこっちに行けるといったものを、計画して作ったつもりであるが、先生方がパッとそう思ってもらえるかどうかは難しい問題である。さて、このテーマは、話が収束するところはないのではないかなと思うが、参考にさせていただきたい。

それでは、次に学事暦とカリキュラムの改革について、議論していきたい。学事暦に関しては、信州大学工学部と大体同じような格好になってきたが、実は信州大学工学部が

なぜこういう形になっているかと言うと、オリンピック冬季競技大会が 1998 年にあった。そのときにボランティア学生を沢山派遣してほしいと長野県から要請があり、学事暦を変えないと学生がボランティアに出られない。要するにオリンピック期間中に試験が入っているということで変えたわけである。オリンピックが終わってすぐに元へ戻したが、先生方が、前の方がずっと良かったではないかということで、要するに、先生方の都合で、例えば長い休みがあると学会に行きやすい。そこで、先生方の都合でまた元へ戻って、オリンピックのときと同じ形になった。全部、カリキュラムを前倒しにしたという経緯があって、今、そのままの形になっている。ということは、長い夏季休業があると、先生方が好きなことができるということだが、裏返すと、学生も同じように好きなことができるということで、つまり、アクティブ・ラーニング、学生の主体的な行動を信州大学では考えなかったが、長野高専はそう考えた。先日、秋入学制度について議論したが、実は夏季休業の長い期間が、秋入学の前にあるので、そこでインターンシップをやったり、海外に行ったり、なおかつ、春も 1 カ月間の休みをとって、高校を卒業して入学する前に海外に行けるという話があり、やはり長い休みをとることによって、学生の主体的な学びを作っていこうという議論があった。多分、長野高専もそういうことを考えて、試験が終わった後に長い休みがあるという形にしたのではないか。信州大学の学生の現状を述べると、長い休みがあってラッキー、そうなっていて、主体的に何をやるというのがなかなかできていないということは確かである。もともと先生方が、ということで始まったので、仕方ないかもしれないが、自分が主体的に何かすることに使えば、すごく良いと思う。インターンシップには、夏季休業に結構沢山の学生が行くようになり、ひとつ効果はあったかなと思う。最近では、企業を良く知ってから行きたいという学生が多くなり、就職のやり方も変わってきたので、インターンシップをやるのが事前にその会社に当たるということになってきているのか。そういうこととしてもそれはそれで良いことであると思う。長野高専もそういう理由で、インターンシップ、海外研修がしやすくなるということで、大賛成なのであろう。学生が積極的に外に出ていき、インターンシップをやるというためには、やはり仕掛けてやらないといけないという部分があると思うが、どの程度、準備が進んでいるのか。

押田副校長：考えているところで、あまり準備が進んでいないが、学生にはどんなことを行うか、簡単に書いてもらい、どのような指導、フォローが必要なのかということ判断して振り分けようと、自分でできる人はもうやってもらおうと、今、考えている。寮務主事は、寮の関係で夏季自主研修期間のところはどうか。

永藤副校長：寮は、9月いっぱい準開寮ということで寮を開け、資格試験、あるいは自主勉強、ゼミもできるように配慮して、ずっと開けておく体制である。そのほか、カリキュラムとは別であるが、寮独自に進路講演会、英語啓発セミナーなどを開催し、なるべく寮生自身で取り組めるような機会を設けているところである。

半田会長：9月から開寮（準開寮）か。

永藤副校長：そうである。8月は改修工事を3週間程度行わなければならないので、その間は閉寮する。それ以外は開ける形をとる。

半田会長：今までは、夏季休業中はほとんど閉寮しており、学校での活動を行うには不便があったということで、9月は開寮するので、自主的な活動ができるということか。

永藤副校長：そういうことである。部活、ロボコン、プロコンなどいろいろな活動ができる。

校長：補足であるが、先ほど池田参与からお話があったが、ただ学生に任せるには学生も経験不足もあり指導が必要と考えている。PDCAで、自分でやりたいこと、そして、自分で課題を発見することが一番大事であり、そういうトレーニングは、簡単に9月でいきなりやろうと思ってもできないので、例えば来年度の予定では、4月29日から5月8日まで学生は連休になる。そのため、先生方と話をしなければならないが、こういう長期の休業を、どう過ごすのかという計画を提出させたいと思っている。計画を提出させて、実際にその期間を過ごし、その後、彼らがどう過ごしたか、それについて自分で気づいたこと、考えたことを書かせたい。来年はそのような機会が何回もあり、8月も寮は閉まっているが、海外に行こうということであれば2カ月近くある。また、12月から1月に掛けても、12月23日が天皇誕生日で、1月9日までである。自分で考えて、プランを立て、それに対して行動したことを評価する。そういうPDCAを自分の行動の中に生かし、プラスにすることは、技術者にとって必要な才能であり、社会人にとっても必要である。

池田参与：3月の休業も長いのか。

校長：今までも海外インターンシップに利用していた。自費であるが、なるべく負担を減らせるような、支援は受けられるように我々も努力する。

半田会長：長野高専は、アルバイトは禁止していないのか。

校長：やはりマイナスの方向を考えてしまうので、許可制である。

半田会長：大学生の就職面接のときに何を一番強調するかというと、アルバイトして学んだというようなことを結構言うようである。社会勉強になった。人付き合いを学んだと

というようなことを言うらしいが、人付き合いも人文系の勉強だという捉え方をするのであれば、アルバイトも悪くはない。よくアルバイトを喧嘩して辞めたという話を聞くが、そういうことに耐えられるようになるには、やはりそれも訓練かと思う。そういうことで、会社に入って3年で辞めたなど、離職率が高くなっている原因にもなっているのではないかとも思う。ある程度、学生のときにそういう経験をしてもいいと思う。長野高専は許可するということか。

小澤副校長：実質、届出である。しかし、飲食業、特に上級生でも酒類を提供する業種は許可しない。長期休業でも難しいところがある。

校長：年齢的にも。また、先ほど述べたように、ただやるのではなく、その後に考えさせたい。

水本参与：学校要覧（22ページ）には、英語コミュニケーション・スキルという授業科目の記載があるが、日本語のコミュニケーション・スキルというのはないのか。最近、気になっていることがあり、電車で通勤しているが、その車内は異様で、若者から年寄りまで、スマホをやっている。新聞を読んでいるのは、私など2人ぐらいである。各企業に聞くと、やはり若者のコミュニケーション能力の欠如というような話も聞くので、アルバイトのことも含めて、コミュニケーション能力は必要であり、それが一番のベースになる。教養はあっても、会話が出来なければ駄目なので、日本語コミュニケーション能力の育成にも力を入れていただきたい。また、インターンシップについては、話があったように、リクルート絡みで受け入れるという企業が、最近、増えてきている。ただ、大学生も夏休みにインターンシップをやる、あるいは高校生もやるということで、企業側はかなり負担になっていることも事実で、高校生のように1日2日程度であれば良いのであろうが、やはり1週間となると負担になるようである。私も、企業に、去年、一昨年と、インターンシップを受け入れていただけますかというアンケートを行い、600社に依頼したが、受け入れが可能は60数社、1割ぐらいで、実際には規模の大きいところ、あるいはもう受け入れ実績のあるところは体制が整っているであろうが、小さいところ、少人数のところについては大変かと思う。長野県でも、海外のインターンシップに、県知事も力を入れて予算を組んでいるが、実際どの程度学生の希望があるのか調査から始め、県と企業で連携して支援するという動きをしている。

半田会長：コミュニケーション能力という話があり、これはなかなか大変である。我々はどう考えているのかというと、卒研で先生方と話をする時間をとるということと、プレゼンを義務づけ、1カ月に1回ずつ、必ず本人の研究内容を説明させ、先生方は、最近

では学生に無理やり「質問しろ」という形で、学生同士で議論させるように仕向けている。そうしないと、先生にだけ向けてプレゼンをしているという学生が多い。だから、二、三人学生に質問させたり、意見を述べさせたりということが無理やりやらせないと、なかなかそういう機会が得られない。大学生のアンケートをとると、卒研が一番良かったという回答があるが、多分、そこで鍛えられているのだろうという感じはするが、最近、研究室の中で何も会話をせずにプレゼンのときだけするという学生が増えてきている。「隣に先輩がいるじゃないか。何で聞かなかったのか。」という会話が結構あるので、何故かと思う。四六時中、同じひとつの部屋にいるのに会話がいないというのはやはり由々しき問題だと思う。やはり飲み会であろうか。飲み会のときに騒いでもらうということも、もう無理にやらないと駄目なのかということで、学生と飲み会をやるのが年に四、五回あるが、我々は、忙しくて出られないが、学生だけは一生懸命やっている。そういうことがあれば、ある程度、上下関係の付き合いはできるのかという感じである。

小澤副校長：高専では、やはり、上下関係、人間関係はやはり部活である。

半田会長：部活をやっている学生はどのくらいか。

小澤副校長：8割ないし9割所属しているが、4、5年になると忙しくなり、名前だけになってしまう。

部活のほか、学生会、学園祭の工嶺祭に関しては、アンケートを見ても、よかった、いい勉強になったという回答である。学園祭は一生懸命やっている。

半田会長：学園祭も一生懸命やると、いろいろ企画しなくてはいけないし、何人も学生を使わないとできない。

小澤副校長：リスクも考えてやっていますから、いろいろな勉強になる。

半田会長：高専生の方が行動力があるのではないか。手を出してくれるという部分では、高専生のほうがやってくれるかと思う。大学生はなかなか手を出してくれない。学園祭でも実行委員長がなかなか出てこない。先輩から言われて、もう無理やりやるという形だ。信州大学工学部では、今まで2日だったところが、今年度は1日になったが、続いたので良かったと思うが、来年も続くのか心配なところがある。本日の議論を教育の改善に結びつけていただきたい。

8. 閉会

閉会に当たり、校長から謝辞が述べられ、総務課長の進行により閉会された。

以上

平成28年度 第1回教育改善委員会議事概要

日 時：平成28年5月25日（水） 16：15～17：15

場 所：専攻科棟 3階ゼミナール室

出席者：委員長 堀内 富雄

副委員長 遠藤 典男

委 員 小林 裕介（機械）、渡辺 誠一（電気）、伊藤 祥一（情報）

山崎 健一（一般）、小林 茂樹（一般）、

議 題

1. 平成28年度教育改善委員会活動方針について (資料No.1)
堀内委員長から、今年度の活動方針について、昨年と同様であるが、中期目標・計画を除外してある旨、また、JABEE 審査があるため、エビデンスの集約について協力願いたい旨の依頼があった。
堀内委員長から、課題の分類、改善提案について、各委員会の活動点検、改善状況、授業改善システムの点検等を行い、FD 研修会の点検の説明、続いて、伊藤委員からエビデンスの集約状況及び保存状態について説明があった。
堀内委員長から、今年度、委員会を5回実施する予定とし、各回の主な審議内容について説明があった。また、業務分担について確認され、承認された。
2. 平成27年度教育改善委員会報告書について (資料No.2)
堀内委員長から、主な活動報告について作成するものであるが、昨年のは、前教育改善委員会で作成中であり、今年度については、年度内に発行したい意向の説明があった。
3. 平成28年度のエビデンス収集・保管について (資料No.3)
伊藤委員から、今年度のエビデンス収集について、従来のとおりの日程で設定した旨の説明があった。
なお、周知方法について意見があり、伊藤委員が周知する旨の説明があった。
4. FD 研修会について
堀内委員長から、今年度2回を予定しており、1回は、情報セキュリティーについて実施したい旨の説明があり、審議の結果、了承された。
なお、実施時期について、試験期間中での実施が多い旨、苦情のある意見が寄せられており、今後、検討願いたい旨の意見があった。
5. その他
渡辺委員から、資料No.1の学生との意見交換について、今年度については、既に意見が集約されており、校長との意見交換を残すのみとなっている旨の報告があった。

以上

次回開催予定 7月20日（水）16：15～

平成28年度 第2回教育改善委員会議事概要

日 時：平成28年7月28日（木） 16：15～16：40

場 所：第2会議室

出席者：委員長 堀内 富雄

副委員長 遠藤 典男

委 員 小林 裕介（機械）、渡辺 誠一（電気）、伊藤 祥一（情報）

山崎 健一（一般）、小林 茂樹（一般）、

議 題

1. 平成27年度授業改善システムについて (資料No.1)
堀内委員長から、授業改善システムについて、改善チェックにより9月末までに実施願いたい旨の依頼があり、審議の結果、了承された。
また、表紙、チェックシートについては、堀内委員長から配布する旨、説明があった。
2. FD研修会について (資料No.2)
堀内委員長から、執行会議より「高専卒業生アンケートから見る高専教育の地平」と題してFD研修会の実施依頼があり、日時は9月21日（水）とし、また、内容は、昨年実施した本校卒業生アンケートの解析結果の報告となる旨の説明があった。
審議の結果、了承され、渡辺委員、小林（茂）委員に担当の依頼があった。
3. 2014年度および2015年度のエビデンスの点検結果について (資料No.3)
伊藤委員から、6月末までとなっていたエビデンスの提出状況について、また、不足しているエビデンスについて、夏休み明けを目途に収集したい旨の報告があった。
なお、堀内委員長から、JABEE 審査が11月にあるため、9月中には揃えていただきたい旨の依頼のある説明があった。
4. その他
 - ・平成28年度の活動に向けた各種委員会等への提言（6/20 執行会議）
堀内委員長から、6月20日の執行会議において、昨年度の各種委員会の活動状況について、各委員会に提言した旨の報告があった。
なお、遠藤副委員長から、今年度の提言について、ヒアリング等を行って提言を作成するか意見があり、堀内委員長から、今後、方針を決めて実施したい旨の説明があった。
 - ・2016年度のエビデンスについて
堀内委員長から、前期分について10月中旬までに揃えていただきたい旨の依頼があった。
 - ・エビデンス保管の電子化の改善について
堀内委員長から、日常的にエビデンスの点検のところで並行して実施されている報告があった。
 - ・メール目安箱について
堀内委員長から、本校ホームページに寮生から苦情の投書があり、担当の部活顧問に通知して処理した旨の報告があった。

以上

次回開催予定

9月27日（火）15：00～

平成 28 年度 第 3 回教育改善委員会議事概要

日 時 平成 28 年 9 月 27 日 (火) 15:00～

会 場 第一会議室

議 題

1. 2014 年度および 2015 年度のエビデンスの点検結果について【資料 1】

成績評価履歴の未提出が多い旨、伊藤先生より報告があった。

エビデンスの提出に関しては、学科長からも依頼してもらうようお願いする。

2. 第 1 回 FD 研修会 実施報告について【資料 2】

資料に基づき、渡邊先生より平成 28 年度第 1 回 FD 研修会実施報告書の説明があった。

FD 研修会に関するアンケートの実施に関する質問があった。質問を受け、10 月中旬を目処に、参加者全員に紙面とメールの両方でアンケートを実施することになった。

3. その他

・平成 27 年度授業改善システムについて 【提出依頼】

9 月末日までに堀内委員長に提出する。

・2016 年度のエビデンスについて

伊藤先生より、メールにて既に周知済みではあるが、前期期末のエビデンス回収期間を 8/22～8/29 より 9/28～10/5 に変更する旨の連絡があった。

・メール目安箱について

4. 今後の検討事項

- ・学習・教育目標の達成度に関する調査の点検（小林裕）
- ・卒業生アンケート調査結果からの改善内容の実施状況の点検（遠藤）
- ・参与会からの改善点の整理（小林茂）
- ・実施済研修会の効果の点検およびその改善（渡辺）
- ・エビデンスの有効活用の検討（伊藤）

次回開催予定 11 月 17 日 (木) 16:15～

平成28年度 第4回教育改善委員会議事概要

日 時：平成28年11月17日（木） 16：15～16：55

場 所：専攻科棟 3F ゼミナール

出席者：委員長 堀内 富雄

副委員長 遠藤 典男

委 員 小林 裕介（機械）、渡辺 誠一（電気）、山崎 健一（一般）

欠席者：伊藤 祥一（情報）、小林 茂樹（一般）

議 題

1. 平成28年度教育改善報告書について

（資料No.1）

堀内委員長から、教育改善報告書の作成について、昨年度と同様に本年度もまとめていきたい旨、平成28年度各種委員会の活動状況の点検結果、平成28年度における各種点検報告、平成28年度FD研修会実施報告、平成29年度の活動に向けた各種委員会等への提言等について、前年度の報告書を参考にして、それぞれの担当により実施願いたい旨の依頼があり了承された。

2. 第2回FD研修会について

（資料No.2）

堀内委員長から、過日、メール審議において、特に問題なしとして了承されたものである旨の説明があった。

なお、堀内委員長から、第2回目のFD研修担当として小林（裕）委員、山崎委員がなっているため、堀内泰輔教員と相談の上、進めていただきたい旨の依頼があった。

また、渡辺委員から、第1回目のFD研修会の報告について、アンケート集計結果を追記した旨の説明があった。

3. メール目安箱について

（資料No.3）

堀内委員長から、学生との意見交換会でメール目安箱の周知依頼があったため、ホームページにある目安箱のページを教育改善委員会の掲示板に掲示し、クラス担任から、アナウンスする方法を考えている旨の説明があり、周知方法について審議願いたい旨の依頼があった。

大きくPRすると個人的主観のものを投書される恐れがあり、また、回答も掲示するため、投書者の意図したものと異なればトラブルの原因になることも考えられる。意見交換会での内容は、教員と学生の相互のコミュニケーションにより解決できるものがある等、種々議論の結果、メール目安箱の扱う内容を簡単な文章にして、クラス担任からアナウンスしていただく方法を堀内委員長が考え、メールで審議することとなった。

4. 平成28年度前期期末試験問題等のレベル保証について

（資料No.4）

堀内委員長から、産業システム工学プログラムにおける前期期末試験問題等のレベル保証について、12月9日までに実施願いたい旨の依頼があり、審議の結果、承認された。

5. その他

- ・堀内委員長から、JABEE の関係で授業改善システムを作成するにあたって、本年度前期の授業公開アンケート及び授業改善報告書を提出願いたい旨の依頼があった。

以上

次回開催予定 1月23日（月）：16：15～

平成28年度 第5回教育改善委員会議事概要

日 時：平成29年1月23日（月） 16：15～17：00

場 所：第2会議室

出席者：委員長 堀内 富雄

副委員長 遠藤 典男

委 員 小林 裕介（機械）、渡辺 誠一（電気）、伊藤 祥一（情報）

山崎 健一（一般）

欠席者：，小林 茂樹（一般）

議 題

1. JABEE 審査結果を受けての報告について

資料No.1-1～1-3

堀内委員長から、第3者評価対応委員会より、JABEE 審査においてW評価及びその他の指摘事項について、関係委員会への対応の依頼のある旨、教育改善委員会から正式に依頼する文書の提案があり、審議の結果、承認された。

また、教育改善委員会への指摘事項について、種々検討され、教務委員会と相談しながら次回の委員会で改善案を作成することとした。

2. 第3回FD研修会について

資料No.2

渡辺委員から、年度計画に掲載しているFDを実施したい旨、テーマ、期日、実施内容等について説明があり、審議の結果、承認され事務より配信することとした。

3. 平成28年度教育改善報告書について

堀内委員長から、平成27年度教育改善報告書の提言による各委員会の取組状況のヒアリング調査について、各委員に実施状況の確認がされた。

なお、堀内委員長から、報告書について年度内に作成したい旨の意向の説明があった。

4. メール目安箱について

堀内委員長から、第4回の委員会において、メール目安箱の対応について提案し、再検討してメール審議することとしたが、副委員長と相談の結果、年度が替わってから担任より口頭で周知することとしたい旨の説明があった。

審議の結果、承認され次回の委員会に原案を提案し、年度が改まってから周知することとした。

5. その他

- ・堀内委員長から、レベル保証の確認シートについて、一般科より提出がないため依頼があった。また、電子情報工学科について、記載例が残っていたため削除して再提出することとなった。

以上

次回開催予定 3月23日（木）15：00～

平成28年度 第6回教育改善委員会議事概要

日 時：平成29年3月23日（木） 15：00～16：45

場 所：第2会議室

出席者：委員長 堀内 富雄

副委員長 遠藤 典男

委 員 小林 裕介（機械），渡辺 誠一（電気），伊藤 祥一（情報）

欠席者：山崎 健一（一般），小林 茂樹（一般），学生課長

議 題

1. 平成28年度教育改善報告書について (資料1)
堀内委員長から、昨日までの締切で報告書の作成依頼をしていたが、一部、集まっていない旨の説明があった。
2. メール目安箱について (資料2)
堀内委員長から、学生へのメール目安箱の周知方法について、通知文書の提案があり、審議の結果、承認され、各クラス担任、専攻長へ周知することとなった。
3. 第3回FD研修会について
渡辺委員会から、本日開催のFD研修会「アクティブラーニングへのアプローチ」について報告があった。なお、明日、希望があれば本日の続きを行いたい旨の説明があった。
また、本日、実施したアンケート結果の報告があった。
4. 今年度の反省点
堀内委員長から、今年度の活動方針の中で、FD研修会について主体性がなかった点、JABEEのエビデンスの提出について協力が得られなかったことが残念であった意見があった。
小林（裕）委員から、各委員会への報告書作成について、主事に作成依頼が通じていなかった点、教員への授業公開アンケートの意味が不明の点が述べられた。
渡辺委員から、教育改善報告書で年度計画に記載のない委員会の報告書作成が困難であった意見があった。
遠藤副委員長から、JABEE、機関別認証評価の点検について、報告書を作成していれば、審査があっても実施した事実が残るので、きちんと実施する必要がある旨の意見があった。
伊藤委員から、ワーキングの立場から、エビデンスのないものがあり、学校として教育の履歴がないのは好ましくない旨の意見があった。

報 告

1. 授業改善システムについて
堀内委員長から、平成27年度についてはJABEE審査により終了しているが、交代される教員においては、次期委員へ引き継いでいただきたい旨の依頼があった。
2. 後期レベル保証の確認について
堀内委員長から、まだ、提出のない学科は、早急に提出願いたい旨の依頼があった。
3. メール目安箱の対応
堀内委員長から、前回の委員から目安箱に届いたメールについて報告があり、当該学科、当該委員長等に対応の依頼済みである旨の報告があった。
4. その他
堀内委員長から、今年度の業務について御礼があった。

次回開催予定 未定